

閑院宮殿下の英武

搜索根拠を高臺子に移す

敵騎の出

搜索根拠を吳家崗子に移す

旅團は是の功績により滿州軍總司令官より威状を附與せらる(騎兵第十五聯隊戦記参照)

是れ我が騎兵第二旅團が、閑院宮殿下に従ひ奉りて其御指揮の下に奮戦したる最後の戦闘なり、是より先九月二十三日殿下には滿州軍總司令部附仰せ付けられしも、後任田村少將(久井)未だ着任せざるを以て引續き職務處理中、此の大戦に會し御指揮を執らせたまひ、劉策宜しきを得且常に先頭に在りて士氣を鼓舞せさせ給ひたればこそ、此の如き戦果を收め得たるなれ、聯隊の名譽將士の光榮且殿下に於かせられても亦御武運目出度御事にこそ、後十六日田村少將着任殿下は遼陽に向はせらる、聯隊は支隊と協力して敵を追撃し、老瓜拉子、迷岔を占領せり、同十七日旅團は第十二師團長の麾下に屬し、李家窩棚に轉し舊核嶺高臺嶺の方向を搜索せり、同十九日夜間を冒して搜索根拠を高臺子に轉し其附近の搜索及偵察に任ずること約三ヶ月、かくて明治三十八年一月中旬に至れり、

#### 第四節 黑溝臺の會戦に參與す

一月初旬より我滿州軍の左翼派遼二水の間には敵騎の出沒絶えず、同十日より十四日に亘り其一部は牛莊及營口に來襲せしが我が守備隊の爲に撃退せらる、其の企圖蓋し我が左翼を脅威し全線の動搖に乗じ大舉攻勢に轉せんとする者に似たり、是に於て旅團は滿州軍總司令部の直轄に屬し此方面の搜索及警戒に任ずることとなり、聯隊は一月十五日頃高臺子出發石炭坑小北河を経て道程二十餘里同十九日吳家崗子に移轉し、此地を根據として荒地阿牛司方面の搜索に任じ又大民屯方向を搜索した

敵大舉して吳家崗子に迫る

聯隊の苦戦

撃退す

同二十五日クリツベンベルグ將軍の指揮する歩兵約七師團及ミンチエンコ騎兵團は相合し大舉して沈旦堡黑溝臺に來襲し、午後〇時四十五分に至りては其一部騎兵約五中隊砲八門は聯隊の據れる吳家崗子に肉薄せり、同一時七分敵の砲兵は老歡坨南端畑地に砲列を敷き我に向て砲撃を開始し、同十分敵騎約二中隊は我が左翼に又約一中隊は右側背に迂回せり、此時我左翼の機關砲隊は迎撃して大損害を與へしかば敵は是より熾に同隊を砲撃す、同二時敵は砲兵陣地を二分して頻りに猛射を加へ屢々輕騎を飛して我陣地を突破せんと企圖せしが我は掩堡に據りて急射撃を加へ之を撃退するを得たり、已にして敵は渾河を渡り老薄倒臺子に入れるを以て我は腹背敵を受け危險云ふべからず午後三時二分皆川中隊長戦死す、此頃戦闘最激烈を極む、而も敵は益増加の様あるを以て聯隊は旅團命令に基き午後十時倒臺子に退却したり、此日黑溝臺は敵の奪ふ所となる是に於て翌二十六日第八師團は全力を擧て攻撃を决行せしも功果を奏せず、依て第三第五師團を増加し連続攻撃を决行し同二十九日に至り漸く敵を撃退するを得たり、此間聯隊は前哨又は停止斥候として監視警戒に任じ又將校斥候を派して搜索連絡に力めたり、

二月一日搜索根拠地を倒臺子に定め前任務を續行しつゝありしが、同八日第三軍の戦闘序列に入る同十五日約八九千の敵は渾河左岸に進出せしが友隊と協力して之を撃退したり、



第五節 奉天會戰に於ける聯隊

有史以來の大野戰たる奉天會戰は二月二十四日より開始せらる、聯隊の屬する騎兵第二旅團は最左翼乃木軍に屬し又其左翼たり、去十五日搜索根據を深井子に移し其附近の搜索に任せし聯隊は、同二十七日日田村支隊に屬し北進の途に就き索敵行動を行ひつゝ、微弱なる敵騎を驅逐し、小黃旗堡南部楊家窩棚、大民屯門臺を経て三月二日曹家臺に着し秋山支隊に屬せらる、茲に騎兵六個聯隊（騎兵第十三同第十四同第十五同第十六同第十七同第十八同第十九）騎砲兵中隊機關砲隊歩兵若干部隊の大集團をなし三月三日秋山少將指揮の下に運動を開始し、午前十時二十分大房身に着す時に同地に在りし我が戦利砲隊は敵を射撃しつゝあり、午後一時敵歩兵約二千騎兵二百砲若干は大房身北方王家窩棚古城子附近より前進して我に向ひ砲火を開く、我砲兵亦之に應じて猛射を加ふ、敵は其左右翼を延伸して我を包圍するの形勢を示したれども我が銃砲火に沮止せられて中止したり、而も勇敢なる敵は砲火を利用して散兵線を進め屢々躍進を企てしが我が横山富田三好池上の各中隊及機關砲の掃射を蒙りて多大の損害を受け遂に退却せり、聯隊は此の行動に據り友聯隊と共に同十二日乃木軍司令官より左の感状を授與せらる

右聯隊ハ秋山少將ノ指揮ニ屬シ三月三日大房身附近ノ戰闘ニ於テ優勢ナル敵ノ攻撃ヲ拒止シテ軍ノ左側背ヲ安全ナラシメ遂ニ之ヲ撃滅シテ多大ノ損害ヲ與ヘ以テ軍ノ作戰ヲ容易ナラシメタリ其功績顯著ナリト認ム依リテ茲ニ感状ヲ授與ス

同四日曹家臺を出發し前心臺子に着し翌五日平羅堡を経て六日對家窩棚に着し奉天の右側背に進出

秋山支隊に屬す

大房身の戰闘

全勝堡の全勝

せり、翌七日より十日に亘り全軍の戰闘正に酣なり、聯隊は引續き索敵行動を行ひつゝ、九日全勝堡に至り田村少將の指揮下に入る、此日石佛寺六間房方向を搜索し再び全勝堡に歸着す、同十日正午より敵の大部隊は續々北退す、支隊は全勝堡に集合して敵を射撃し且命を待てり、午後一時二十分支隊の行動に伴ひ三臺子四臺子を経て沙崗子着、同二十二日沙崗子を経て草根泡に宿營す、越えて十五日其西方馬家荒地に移動せり、此間軍の追撃隊は猛進して鐵嶺の線に達す、同十六日聯隊は秋山支隊の左側衛となりて北進し永安堡に着す、此夜秋山支隊の編成を解き當旅團は軍司令官の直轄となれり、

第六節 奉天以北に於ける行動

奉天會戰の終れる三月十七日、聯隊は旅團と合して永安堡を發し道を法庫門より奉天に通ずる街道にとりて北進し此夜石佛山に着、翌十八日興隆山に轉じ同二十二日同地出發小塔子を経て二十三日平安堡に着、附近の搜索に任せり、四月二日搜索根據を金家屯に定め索敵行動中其一部は翌三日寶力屯に於て敵と遭遇戦を開始し金家屯に退却す、翌四日午前八時敵は再び肉薄せしが歩兵部隊と協力して之を撃退したり、同九日搜索根據地を劉家屯に移し同十五日寶力屯に向て行進中、再び敵と遭遇し同十六日に及ぶ敵は歩兵部隊の夜襲を受けて退却せり、

同十九日三好中隊は遼陽窩棚方面を搜索し、岡田(第二)中隊は卡婁附近を搜索すべき任務を受け、先づ日野將校(中尉度治)を派遣せり、然るに該斥候は卡婁の南方約千米突の地點に於て濃霧に乗せる

金家屯の戰闘



敵圍を受け、一行死地に陥りしが漸く圍を潰れて歸還せり、時に乃木軍司令官より威狀を授けられたる者左の如し、

騎兵第十六聯隊第二中隊 陸軍騎兵軍曹 萩原菊五郎(東京市小石川區表町)

明治三十八年四月十九日將校斥候長ニ從ヒ金家屯東方卡婁方面ノ敵情偵察ニ從事スルヤ霖雨未ダ止マラズシテ展望自在ナラズ加フルニ泥濘馬脚ヲ没シ丈餘ノ地障縦横道路ヲ遮リ運動甚ク困難ナルモ軍曹ハ常ニ先頭ニアリテ巧ニ地形ヲ利用シ東奔西走斥候長ヲ補助シ既ニシテ坎樹林子ニ近接シ軍曹斥候長ト先ヅ高地ニ登ルヤ俄然伏兵ノ起ルアリ其ノ數五六十騎噴鳴シテ襲ヒ來リ勢疾風ノ如ク距離三百米突ニ過ギズ我兵將ニ全滅ヲ免レザラントス斯時ニ當テ軍曹克ク沈毅危ニ處シ部下ヲ糾合シテ殿戰最モ勇メ地障ニ遭過スル毎ニ且ツ敵兵ヲ監視シ且ツ地點ヲ我兵ニ指示シテ其通過ヲ容易ナラシム然レドモ時ニ馬匹疲憊シ駆歩已ニ繼カズ速歩復速ナラズ而シテ敵騎二三早ク退路ニ進出シテ包圍ノ勢ヲナシ我兵進退谷マレリ是ニ於テ軍曹決然馬ヲ止メ拳銃ヲ連發シテ敵兵ヲ防拒シ以テ斥候長以下ヲシテ九死ノ危地ヲ脱スルコトヲ得セシメタリ軍曹ハ之ガ爲メ獨リ敵兵ノ包圍スル所トナリ終ニ免ルベカラザルヲ知ルヤ存命トナルヲ耻トシ拳銃ヲ以テ自ラ咽喉ヲ射テ仆ル敵兵即チ其武器ヲ奪ヒ去レリ然レドモ軍曹ノ創幸ニシテ致命ニ至ラズ後士人ノ救護ニ因リ我前哨ニ收容セラレタリ(明治三十八年八月一日付)

康平西方  
地區の搜

隊 佐原搜索

五月四日再び根據を金家屯に轉じ爾來太平庄双堆子康平卡婁四面城方面の搜索を擔任し時々斥候の衝突あり、五月十八日より三十一日に至り三好池上兩中隊は田村旅團長指揮の下に康平西方地區の敵狀搜索に任せり、五月三十一日搜索根據を北西なる義合屯に移してより六月二十四日郭家窩棚に七月二十四日大莫力克に移し前任務を履行し、且遠く漢南蒙古地方を搜索せり、

是よりさき島野中尉(實)の率ゆる混成一小隊は、蒙古内部の敵狀を搜索すべき命を受け、第一旅團佐原大尉の率ゆる混成一小隊と共に六月二十五日下士以下三十騎を率ひて出發せり、此等搜索隊は爾

來敵旬、遠く蒙古内地に進入して苦心慘慄敵狀及地形を偵察し、作戰上有益なる報告を齎らし八月中旬歸還せり、之が爲め九月七日附を以て乃木軍司令官より威狀を授與せらる、

佐原搜索隊 騎兵大尉佐原敬三の率ゆる騎兵第一旅團の一小隊 騎兵中尉島野實の率ゆる騎兵第二旅團の一小隊

明治三十八年六月二十六日哈拉沁屯、彰武縣ヨリ齊々哈爾方位ニ出テ蒙古内部ノ敵狀及地形ヲ偵察スベキ任務ヲ以テ宿營地劉家窩棚ヲ出發シ彰武縣「ナイムアン」「アルホルナン」「東西「チヨロソト」「チヤスト」旗下ノ諸部落ヲ經テ托羅河ヲ渡リ狼北進ヲ繼續セントシタルモ情況之ヲ計サバハルヲ以テ已ムヲ得ズ往路ト路ヲ異ニシ「タラハン」「ボウラン」「ビントロン」旗下ノ諸部落ヲ經八月十三日宿營地ニ歸還セリ行程實ニ三百有餘里日數約五旬簡編ノ地圖ヲ按シテ深ク不毛ノ地ニ入り陸身瘁弱ヲ冒シ饑渴窮乏ヲ忍ビ或ハ地方團練ノ妨碍ニ會ヒ或ハ有力ナル敵兵ノ探知スル所トナリ一難ヲ經ル毎ニ銳氣加倍シ周到緻密ナル計畫ヲ以テ若々任務ヲ實行シ縱橫敵地ヲ馳驅シ遂ニ克ク蒙古内部ノ地形物資人情、風俗及制度ヲ查察シ敵ノ四方地區ニ於ケル勢力範圍ト行動トヲ探究シ我將來ノ作戰上ニ裨益アル報告ヲナシタリ其功績大ナリトス

察古遠征

八月二十六日近來敵は其右翼を蒙古内地に延長し、其圍内の人民は彼に歸伏し、我が小部隊の通過するあれば之に妨害を加ふるを以て之に大打撃を與ふるに決し、翌二十七日日本多大佐は聯隊機關砲一小隊及歩兵第十八聯隊一中隊を率ひて蒙古古伯王府に向ふ、之に先ち安藤將校斥候は道路偵察の任務を帯びて先發し、二十八日蘇各營子に於て敵の包圍を受け苦戰中聯隊の前衛は急進して此の敵を驅逐せり、尋て二十九日伯王府に入り附近の敵狀を偵察し大に我が軍容を示し同三十一日大莫力克に歸還せり、此間安藤中尉部下の堀川一等卒は勇敢なる行動に依り乃木司令官より威狀を授與せらる、

騎兵十六聯隊第三中隊 陸軍騎兵一等卒 堀川 清(神奈川縣久良清(岐阜六浦莊村)



明治三十八年八月二十六日夜半、斥候長三郎、宿營地ヲ出發シ、晝夜兼行具ニ艱難ヲ嘗メ、巳ニ大莫力克ヨリ、哈拉奈海ヲ經テ、伯王府ニ至ル。道路偵察ノ任務ヲ遂テ、復所屬聯隊日ナラズ前進シ、來ルヲ以テ更ニ敵狀ヲ偵察セント欲シ、二十八日伯王府方向ニ前進スルヤ、四蘇各營于北方高地ニ於テ忽チ敵騎約二百ノ南トスルニ遭遇シ、之ヲ退避スルニ當リ、急進セラレ、馬匹甚ク疲勞シテ、速度遲緩シ、敵將ニ追及セントスルヲ以テ、一等卒ハ斷ヘズ、馬上敵ヲ射撃シ、之ヲ阻止スルニ努メタルモ、四蘇各營于南方高地ニ到ルニ及テ、馬力殆ンド竭キ、遂ニ敵騎十數百ヲ揮テ、逼追シ、其一騎方ニ一等卒ヲ斬撃セントス、一等卒ハ膽氣剛勁、然銃口ヲ其胸部ニ擬シ、一撃之ヲ登ス、敵爲メニ逸進シテ、進マズ、斥候長以下乃チ間ヲ得テ、南方高地ニ達シ、射撃ヲ以テ敵兵ヲ拒止シ、繼ニ其追撃ヲ免ル、ヲ得タリ。(明治三十八年九月二十九日付)

爾來引續キ敵狀搜索ニ警戒ニ任務を續行する中、九月十七日休戰の命に接し、十月十七日平和克復の通報を受く、即ち翌十八日前哨を撤し、同二十一日大莫力克を發し、二十三日西塔山子に着凱旋の日を待つ。

### 第七節 平和及凱旋

明治三十九年一月二十九日、鐵嶺より乘車凱旋の途に上る、聯隊日記に曰く、「時方さに三冬の候風雪、濱紛として窓を打ち、白雪皚々山野を埋めて、滿目肅條たり、而もこれ悉く新戰場彼我共に血を流して争ひし所、今悠悠車上に坐し、夢寐の間に之を過ぐと雖も、戦死せる幾多の同胞に對し、いかで感慨の情起らざるなきを得んや」と人情應に然り、二月一日より大連着直に乘船廣島東京を経て、同十二日十三日習志野の衛戍地に着し、同十八日復員全く完結せり、時に聯隊の幹部左の如し、

騎兵第十六聯隊幹部部(凱旋時)			
聯隊長大佐	本多道純	第一中隊長	日野虔治
聯隊附少佐	佐伯岩二	第二中隊長	岡田三太郎
副官大尉	友田元效	第三中隊長	山本十三郎
旗手少尉	前田岩太郎	第四中隊長	横山伊之助
一等軍醫	長谷川春治	小隊長	加藤弘三
二等軍醫	藤井正真	小隊長	小島三郎
三等軍醫	井野場象次郎	小隊長	加藤弘三
獸醫	若木寅之助	小隊長	加藤弘三
主計	大月市作	小隊長	加藤弘三

#### 騎兵第十六聯隊死傷者連名

- 功五勳五
- 大尉 皆川諭重 三八、一、二五、吳家岡子戦死
  - 中尉 蒲 穆 三八、一、二五、吳家岡子負傷
  - 同 川崎次郎 三八、一、二五、吳家岡子負傷
  - 同 日野虔治 三八、四、一九、土城子東北方負傷

花よりあくる、みよしの、春のあけぼの、見渡せば、

もろこし人もこま人も、やまと心になりゆへし、

頼山陽



### 第十三章 野戰砲兵第一聯隊 (千葉縣國府臺)

◎第一節 征途◎第二節 十三里臺の戦闘◎第三節 金州南山の戦闘◎第四節 旅順要塞前進陣地の戦闘◎第五節 高崎山附近の戦闘◎第六節 旅順第一回總攻撃◎第七節 師團の總攻撃◎第八節 旅順第二第三回總攻撃◎第九節 二〇三攻略及旅順開城◎第十節 奉天會戰に於ける聯隊◎第十一節 滯陣及凱旋

#### 第一節 征途

出發前後の状況

明治三十七年妖雲滿韓の野を蔽へる三月六日聯隊は動員令を受領す、將士皆戰時職務に就き同十二日動員完結、三月十九日より聯隊長兵頭大佐指揮の下に征途に上り廣島に集中を終る、同地に滯在すること約一ヶ月、四月二十日より加賀丸外七隻に乗り組み宇品港を解纜し鎮南浦に假泊する數日、五月十日を以て清國盛京省孫家咀子附近に上陸す、當時聯隊幹部の組織は左の如し、

砲兵第一聯隊		第一大隊		第二大隊	
聯隊長 大佐 兵頭 雅譽	副官中尉 板倉 光夫	大隊長 少佐 水谷 喜三郎	副官中尉 秋田 完吉	大隊長 少佐 町田 英太郎	副官中尉 吉田 正雄
一等軍醫 安島 進平	二等軍醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦
二等軍醫 吉田 正雄	二等獸醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 小野 寺益	中隊長 中尉 小野 寺益	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦
二等獸醫 吉田 正雄	二等獸醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦
二等獸醫 吉田 正雄	二等獸醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦
二等獸醫 吉田 正雄	二等獸醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦
二等獸醫 吉田 正雄	二等獸醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦
二等獸醫 吉田 正雄	二等獸醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦
二等獸醫 吉田 正雄	二等獸醫 吉田 正雄	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 須藤 注連吉	中隊長 中尉 下條 志津會	中隊長 中尉 河合 銚彦

幹部	北里 龜太郎	隊	平木 桂次郎	第六中隊長	染谷 銀三郎	小隊長	丸山 康三
同部	高塚 年太郎	聯隊	長 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三
三等主計	淺尾 十郎	隊	中尉 押小路 實英	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三	中尉 大尉 岩部 順三

#### 第二節 十三里臺の戦闘

聯隊の全部は五月十二日を以て刑家屯藩家屯附近に集合を終り後命を待つ、十四日命令あり曰く師團は金州北方及東北方高地線を占領する目的を以て明日衣家屯附近に進せんとすと、此命令に基き聯隊は十五日午前七時宿營地を發す時に春や、深く桃李花爛熳を呈し綠草野に送れども道路險惡砂礫車輪を没し、加ふるに長途の航海に人馬疲勞せる後なれば行步難多く漸く午後八時三十分を以て目的地に達するを得たり、

同十六日午前六時宿營地を發す、第一大隊は前衛に屬し第二大隊は本隊に配せらる、時に霖雨蕭々頗る展望の便を缺く、午前九時二臺子に着するや敵砲

野戰砲兵第一聯隊長砲兵大佐兵頭雅譽氏は、愛媛縣北宇和郡元結掛村に生る、南豫の地由來好景に富む、加ふるに宇和島藩士伊達侯の率先義を唱へし所、此の天然及氣運の中に人となる氏が沈着にして懇篤、而も陣頭に立つて剛毅果敢なるは素より其所なり、故に早く士官學校に入り明治十二年已に陸軍砲兵少尉に任ぜらる、爾來累進少佐に任ぜられ日清戰役に従ひ功あり、同三十一年中佐同三十五年一月大佐に任ぜらる其日露戰役に於ける功績は本戰記の證する所、出征より凱旋に至る迄始終一貫指揮を繼續せられし武運強き勇將なり、

第三編 部隊の活動

第十三章 野戰砲兵第一聯隊

戰機迫る



開戦第一の砲火

聯隊の苦

敵兵退却

兵頭大佐直話

二發空を劈きて後方に破裂す、知るべし戦機の逼れるを、午前十一時師團長の命令により第一大隊は先づ關家店北方高地(標高約八十米突)稜線後に砲列を布置し肩塔を構築す、土地礮确にして掘開容易ならず歩工兵の助力を得て漸く陣地に就き、午後零時四十分第二中隊先づ十三里臺西方高地に據る敵砲兵に向て砲火を開始するや、敵は疾風射を以て應戦す、距離約三千七百米突此時濃霧未だ霽れず我は照準を定むるに少からぬ困難を感せるに反し、敵は已に測射せるもの、如く有功なる曳火彈は續々我が頭上に炸裂し、少佐水谷喜三郎先づ重傷を負ひ次で聯隊本部を一掃し聯隊長を除く外附近にありたる者皆死傷し將校の負傷せる者五名下士以下の負傷亦少からず、而も勇敢に任務を續行せり、午後一時三十分第二大隊は第一大隊の南方に陣地を占め歩兵第二聯隊に對する敵の右翼歩兵を射撃す、已にして我が砲の威力漸く現るゝや一時五十分敵砲兵は先づ退却を始め歩兵之に續く、聯隊は急射を其の頭上に灑ぎ敵影を見ざるに至て射撃を中止す、時に薄暮漢々士氣昂々、此夜韓家屯畑地に露營せり、謹嚴にして沈着なる兵頭聯隊長當時の心事を語りて曰く「實は初めての戦闘ですからどうかと心配しました、が照準手射手相ついで倒れても兵率は平生演習でやると同じに任務を遂げて呉れたのは何より嬉しくある、是で私も安心しました、そこで彼等は勝つか負けるかと心配する様子はなくいつも勝つものと思つてゐる」と此必勝の精神あり我軍の勝利を得る偶然にあらず、

### 第三節 金州南山の戦闘

十三里臺の戦後聯隊は金州東北方高地に陣地を構成し、聯隊長大隊長各中隊長は南山攻撃準備として陣地及敵備砲の偵察に力めつゝあり、

五月二十五日拂曉より金州の攻撃は開始せらる、未明第六中隊より砲二門を出し拂曉より野戦砲兵第十三聯隊と共に金州城を砲撃せしめたり、同小隊は終日緩射を行ひ午後九時陣地を撤して石門子陣家屯間の聯隊主力に合す、此夜前進を開始す、時に烈風豪雨を伴ふて至り電光雷鳴之に和し光景轉た慘悽行動困難を極む、午前四時三十分辛うじて金州東門外地隙内に達し陣地に就くを得たり(第一師團戦記四一—四二頁参照)午前五時第五中隊をして歩兵第一聯隊の金州城攻撃に對し援護射撃を行はしむ、程なく金州城は我が手に落つ、仍て午前五時五分榴彈を以て南山の砲兵に向ひ射撃を開始するや敵も亦應射す續て我全砲兵は一齊に猛火を集中し南山は全く砲烟に包まれ九時十分に至りては敵砲兵沈黙せり、茲に於て掩堡に火力を轉ず、時に我が歩兵隊は屢々突撃せしが機關砲の掃射を受けて奏効を見ず、聯隊は命に依り七里庄西南方畑地に陣地を變換し極力敵陣地の内部及掩堡に猛射を加ふれ共防備至嚴にして歩兵部隊の突撃を許さず、終に右翼大隊に陣地變換を命じ榴彈を斜に亂射し漸く一條の突撃路を開き、午後七時十五分に至り全く南山を占領するに至れり、仍て聯隊は大房身北方高地に陣地を變換して追撃射撃を行ひ敵に多大の損害を與へ此夜金州南門外に露營せり、

### 第四節 旅順要塞前進陣地の戦闘

金州城落つ南山を砲撃す

前進開始

南山占領



双葉溝附近の戦闘

奥野上等兵の勇敢

付家向子附近の戦闘

胡家屯附近の戦闘

南山戦後劍山案子山の線に停止したる我第一師團は、軍の行動に伴ひ七月二十六日より攻撃運動を開始せり、聯隊の第一大隊及第四中隊は師團の右翼歩兵第一聯隊の攻撃を援助し、標高一七四高地營城子停車場金龍寺溝の敵砲兵を猛撃し第二大隊(第四中隊缺)は師團の左翼即歩兵第二旅團の標高一七八高地同二四四高地及同二七一高地の攻撃に對し援助射撃を行ひ、遂に之を占領するに至れり、此の間忠勇義烈乃木軍司令官より感状を授與せられたる者左の如し、

野戰砲兵第一聯隊第二中隊 陸軍砲兵上等兵 奥野松之進(長野縣諏訪郡四賀村)

明治三十七年七月二十七日營城子附近ノ戦闘ニ於テ第三砲車ノ一番砲手タリシガ偶々敵彈來テ一砲手之ニ斃レ砲車長以下三名重傷ヲ負フテ直ニ自ラ車長トナリテ砲手ヲ兼テ後ヲ搬送手一名ヲ招致シテ射撃ヲ續行シ最後ニ輪卒一名ノ増援ヲ得克ク戦闘終局マテ其射撃ヲ繼續シタリ(明治三十八年五月二十二日付)

同三十日午前一時長嶺子を發し付家向子西北高地に陣地を占め、第一大隊は右翼歩兵第一旅團の向へる西泥河子東方高地を、第二大隊は左翼第二旅團の火石稜南方高地に向ひ、援助射撃を行ひて之を占領するに至らしめ、薄暮西泥河子に露營す、

### 第五節 高崎山附近の戦闘

八月十三日師團の高崎山附近の戦闘は開始せらる、聯隊は夜間を利用して運動を開始し非常なる困難を冒して前進し胡家屯附近の陣地に就く、翌十四

名譽ある殊勳將校

旭三功三 砲兵大佐 兵頭雅譽(愛媛)  
旭四功四 同 少佐 古賀治人(福岡)  
同 同 朝川瀨平(三重)

名譽ある殊勳將校

一砲車僅に二名

日拂曉聯隊(第四中隊缺)は一七四高地を砲撃し第四中隊は後備歩兵第十五聯隊の向へる二三一高地を射撃す、敵亦熾に應射せるを以て我死傷續出し中にも第六中隊某小隊の如きは、單に二名を残すに至る、苦戦此の如くなるにも拘らず勇敢に射撃を續行し夜に入り陣地を曲家屯南方に轉ず、翌十五日亦標高一三一高地及歩兵第十五聯隊の攻撃しつゝ、ある礮臺溝南西方高地(高崎山)の掩體を砲撃破壊し、之を占領するに至らしめたり、

### 第六節 旅順第一回總攻撃

八月十九日より軍は第一回の總攻撃を行ふ、聯隊は其主力を以て右翼後備歩兵第一旅團の攻撃目標たる標高一七四高地を砲撃し一部を以て寺兒溝北方高地の散兵壕を射撃す、やがて後備歩兵第十五聯隊の突撃して中腹に遮蔽するや、其前進路に向て迅速射を行ひ、又後備歩兵第一聯隊の占領地に敵の逆襲するや、其後續部隊に曳火彈を加へて之を制壓し

旭四功四 同 大尉 須藤注連吉(群馬)  
旭五功五 同 同 河合録彦(東京)  
同 同 同 押小路實英(東京)  
同 同 同 秋田完吉(京都)  
同 同 同 平木桂次郎(福岡)  
同 同 同 山本光昭(岡山)  
同 同 同 塚越照(茨城)  
旭六功五 同 同 鈴木四郎(福岡)  
同 同 同 渡邊達(福井)  
同 同 同 砲兵中尉 三好新三(東京)  
同 同 同 福地徳太郎(三重)  
同 同 同 仁禮三次(鹿児島)  
同 同 同 稻宮了三(山口)  
同 同 同 二等砲臺 角田松兵衛(千葉)  
同 同 同 砲兵中尉 中島又三(埼玉)  
同 同 同 同 牧野透(愛知)  
同 同 同 同 浅田健太郎(愛知)  
同 同 同 同 高島喜起(東京)  
同 同 同 同 石原太之助(鹿児島)  
同 同 同 同 眞井滌(福岡)  
旭六功六 同 同 田中慎一郎(新潟)

一七四高地の攻略

第三編 部隊の活動 第十三章 野戰砲兵第一聯隊



たり、時に彼我歩兵の距離五十米突に過ぎず射撃の困難察するに餘りあり、翌二十日二七四高地を望めば歩兵部隊は依然前日の位置にあり、仍て午前六時第一大隊及第四中隊は着発弾を以て散兵壕及機關砲の破壊に任じ、第五第六中隊をして同高地の斜面及其後方を射撃せしめ漸次速度を増す、午前十時四十五分歩兵部隊は突撃を決行し、惡戦格闘の後之を占領せり、尋で敵の逆襲あるや聯隊は猛烈なる砲火を雨注し之を制壓したり、

翌二十一日歩兵第一聯隊の鉢巻山攻撃を援助し遂に之を占領するに至らしめたり、爾來第一大隊各中隊より別に一小隊宛を編制し、太平溝附近の歩兵線に接近して陣地を占め、他の砲兵より攻撃し得ざる突角を射撃しつゝあり、

鉢巻山攻

### 第七節 師團の總攻撃

第一師團單獨の攻撃は九月十九日開始せらる、聯隊は十八日の夜陣地に就き、十九日午後より右翼隊後備歩兵第一旅團の二〇三高地、中央隊歩兵第一旅團のナマコ山攻撃に對し援助射撃を行ふ、翌二十日午後四時五十分全力を擧て猛火をナマコ山に注ぐ、命中確實敵の掩蓋飛散し敵兵の隻影を認めざるに至る、歩兵隊は此機に乗じ同山を占領せり、然も二〇三高地は猛烈なる火力も激烈なる突撃も未だ効果を表はさず、同二十二日第四第五中隊より各一門の砲をナマコ山の陣地に就かしめ同高地西北突角を射撃せしむ、其距離僅に七百米突殆と百發百中の効を現せり、然るに歩兵部隊は死傷算なく遺憾

猛火をナマコ山に注ぐ

二〇三に猛射を加ふ

ながら師團命令に依り攻撃を中止するに至れり、

### 第八節 旅順第二第三回總攻撃

十月二十六日歩兵第二聯隊は松樹山中復散兵壕を奪取す、同二十九日拂曉敵の逆襲を受け奪取せられしが同日午後之を回復したり、此間聯隊は數の砲兵及増加隊に對し制壓射撃を行へり、同三十日第二回總攻撃は開始せられ歩兵第二聯隊は松樹山に向ひ突撃せしが遂に不成功に終る、聯隊は依然前任務を遂行したり、

十一月二十六日拂曉より第三回總攻撃は開始せられ、聯隊は前任務を遂行せしが亦もや不成功に終りき、

### 第九節 一〇三攻畧及旅順開城

軍は全力を擧て二〇三高地に向ふ、十一月二十七日第一師團の右翼は南西方より中央隊は北方より攻撃を企て十二月一日に至る連続五晝夜、多

名譽なる死傷將校

大隊長 旭五功四砲兵少佐	水谷喜三郎	三重縣桑名郡桑名町新地	十三里重傷死
同 旭四功四同	町田英太郎	東京市淺草區今戶町六	病死
小隊長 旭五功五同	大尉 中澤 龍男	秋田縣平鹿郡吉田村	小東海戦死
同 旭六功五同	中尉 正木 一三	東京市豊島區平河町五ノ四	田義屯戦死
同 旭五功五同	大尉 林 貞三	岐阜縣岐阜市泉町四〇八	胡家屯負傷
同 旭六功五同	畑 俊六	東京市大久保餘丁町一六	東溝負傷

第三編 部隊の活動 第十三章 野戰砲兵第一聯隊



二〇三延

占領  
旅順開城

遼陽附近  
の集中

拉木河の  
戦陣

也什牛条  
の戦陣

小隊長 旭六功五同	大尉 岩田 恒房	岡山縣岡山市門田屋敷	胡家屯負傷
同 同	岩崎 亨太郎	鳥取縣鳥取市西町一六五	同
同 同	中尉 岡高 彌高	岡山縣上道郡三福村門田	同
同 同	伊東 廉三	福島縣福島町福島新町	南山負傷
同 同	飯田 繁次	東京市下谷區中坂町二八	胡家屯負傷
同 同	丸山 富樹	静岡縣志太郡栗梨村西方	同 負傷
段列小隊長同	少尉 佐藤伊三郎	長野縣上伊那郡伊那村	沙嶺堡負傷

大なる損害を受け一時攻撃を中止せり、此間聯隊は友隊と協力して其頂上及後方を猛射せるのみならず、其後も引續き工事の妨害及逆襲阻止の目的を以て晝夜の別なく射撃を續行せり、十二月五日師團は新來の第七師團と協力して攻撃を開始し、砲兵は猛火を集中し殊に我が二十八珊知砲の威力猛烈を極む、敵稍々退避の狀あり、是より巔き第六中隊より一七四高地に出せし一門及ナマコ山瀧家屯附近にありし各小隊も良好なる射撃をなし敵に大なる損害を與ふ、時に我歩兵は西南頂を占領し鞍部に向て前進するに敵は東北部に據りて動かさず、各砲兵は此地點及山背を猛射して後續部隊を遮斷し、午後二時山頂全部を占領するに至れり、二〇三の占領は旅順要塞の死命を制せる者、爾來同二十八日二龍山を、同三十一日松樹山を爆破して占領し、威狀受領師團戰記にあり、遂に明治三十八年一月二日を以て旅順の開城を見るに至る、

(威狀) 野戰砲兵第一聯隊第四中隊第五砲車

明治三十七年十一月二十九日二〇三高地攻撃ノ際敵火猛烈ニシテ砲車長以下皆死傷セルモ補充兵二人ヲ得テ獨射撃ヲ繼續シ  
克ク砲車ノ威力ヲ維持シタリ其動作壯烈ナリトス(明治三十八年五月二十二日付)

第十節 奉天會戰に於ける聯隊

時に彼我の主力は沙河附近に對峙し戰機正に熟し山雨來らんとして風樓に滿つるの概あり、聯隊は軍の北進に伴ひ一月二十四日より北進の途に就き、二月中旬沙河線に達し鳳村東西九道凸附近に集結せり、

二月二十七日聯隊は奉天右側背に進出すべき軍の行動に伴ひ、午前四時宿營地を出發し榛子崗老薄林家泡を経て北進し、右側背に屬せる第一大隊は三月一日下堡子に、本隊たる第二大隊は同二日拉木河に達す、

二日午後四時敵の大縱隊は嚴家荒方面より藍山臺に向て行進す、第二大隊及機動砲中隊は師團命令に基き拉木河東方約千米突の畑地に陣地を撰定し、今や第九師團と對戰中なる敵砲兵の側面を猛撃して之を沈黙せしめ、尋で陣地左方千二百米突なる長堤に據れる敵の歩騎兵に目標を轉じ、交戰約一時間日没に及び拉木河に復歸せり、同三日也什牛条南端に放列を布き劉家荒西方に出現せる砲兵の側背を射撃して沈黙せしめ、午前九時鄧密荒より西に前進せる敵の大縱隊を猛射して敗走せしめたり、

又右側背に屬せる第一大隊は三月二日沙嶺堡の東端に放列を布置し、藍山臺南北に據れる敵歩兵を攻撃す、其距離僅に六百米突なりしを以て効力偉大敵に大損害を與へ擊退せり、翌三日同地の敵は砲二十六門を以て我が陣地及沙嶺堡を搜射し、其歩兵は前方八百米突に殺到せり、我が各砲兵は猛火を注ぎて之を擊退し路を失して磨となりし敵兵約二百、翌四日命により第一大隊は本隊に合せり、

同日聯隊は也什牛条を發して北進し六日平羅堡に着、此日高力屯及八家子に敵の歩砲兵を猛撃し、



田義屯の戦況

各中隊苦戦 騎兵の襲撃 漸く撃退

翌七日造化屯の敵砲兵を砲撃して潰亂せしめたり、

同八日師團の全部は田義屯に達す、午前九時三十分左翼隊に屬せし第二大隊は同村東端の陣地に就けるも、曉霧深く閉して射撃を開始するに由なし、加之敵は全く陰蔽陣地に據り我が歩兵に疾風射を加ふるも其處在を知るに苦しむ、午前十一時ウングン北方森林方向に八門の砲兵を發見し、第五中隊をして之を射撃せしめ其他をして右翼に連る砲兵を射撃せしめたり、午後零時五十五分機動砲二中隊は陣地を田義屯東北方約千米突の雜樹林附近に變換し、尋て第二大隊の全部亦命により陣地變換を行はんとす、此時豫備隊も亦前進を始め、同時に三臺子東北方の敵砲兵は之を見て疾風射を加へ我を塵殺せんとす、爲に大隊の陣地變換は中止せられ専ら此の有害なる敵砲兵の撲滅に力むと雖も位置不明徒に多數の彈丸を費せしに過ぎず、我豫備隊の活動し能はざるに至るや敵砲兵は機動砲中隊に射向を轉じ疾風迅雷の勢を以て之を縱射す、同中隊は戦況悲惨を極め各砲車僅に二乃至三名を餘す苦境に陥りしも勇猛果敢に健闘して屈せず、全線の砲兵亦殊死して疾風射を加ふ、冬の日脚短く人影長く引き曉將に時に歸らんとする頃忽ち呼ぶ聲あり、曰く「騎兵、騎兵」と驚きて左顧すれば敵騎兵約一中隊俥馬に跨り白刃閃々意氣揚々機動中隊に殺倒し尙多數後續部隊あるを見る、危機一髪同中隊の安危實に三分時を出でず、第六中隊の四門は即時此騎兵を猛射し、機動砲中隊の殘員亦死力を盡して被彈射を行ひ漸く古來有名なるコナツク騎兵の銳鋒を折き之れを擊退するを得たり、而も同中隊の損害は多大機動砲二中隊を合して健康者僅に十有六名、遂に其編制を解きて各中隊に復歸せしめたり、此の間

聯隊將士の忠烈

聯隊の將士如何に健闘せしかは乃木軍司令官より授けられたる感狀に詳かなり、

野戰砲兵第一聯隊機動砲兵第一第二中隊

明治三十八年三月二日沙嶺堡ノ戰闘ニ於テ敵ノ逆襲ヲ受ケルハ迅速拉木河附近ニ進出シテ放列ヲ布設シ敵ヲシテ全カテ我友軍ニ注クヲ得サランメ同六日敵ノ大部隊高力屯ニ攻撃シ米ルニ際シ突然秋家屯ニ現出シ敵ノ側面ニ向ツテ縱射シ其企圖ヲ破リ以テ友軍ノ危急ヲ救ヒ同七日第九師團ニ對シ頑強ニ守備セル造化屯ノ敵ニ向ヒ側背ヨリ猛射ヲ施シ遂ニ退却スルノ止ヲ得ザルニ至ラシメ同八日田義屯附近ノ戰闘ニ於テ我前線近ク進出シ爲メニ一時苦戦ニ陥リタルモ我歩兵ヲシテ「ウングン」ニ進出チ容易ナラシメヨリ(明治三十八年五月二十六日付)

野戰砲兵第一聯隊第二中隊 陸軍砲兵軍曹

武井治 利長野(無上水内郡戸隠村)

同 第三中隊 同

宮深一之(同郡川岸村)

同 第一中隊 同 上等兵

栗田菊五郎(群馬縣群馬郡野馬新井村)

明治三十八年三月八日田義屯附近ノ戰闘ニ於テ三面ヨリ敵ニ包圍セラレ、ニ當リ我陣地ハ平坦開潤ニシテ地物ノ據ルベキモノナク中隊ノ將校以下死傷續出シ身モ亦負傷シ放列線内約五六名ノ健全者ヲ殘スノミ此時ニ當リ軍曹等ハ勇奮率先克ク射撃ヲ繼續シ而モ敵騎約一中隊左側背ヨリ襲撃シ米リ戰況危急ナル場合ニ於テ沈着殘員ト協力シテ敵ヲ擊退セシモ益戰況不利トナリ健全者ハ減少シテ亦奈何トモスル能ハズ茲ニ於テ萬一火炮ヲ敵手ニ委スルモ使用ニ堪ヘザラシメンカ爲メ擊發機關ヲ分解シ之ヲ身邊ニ收メ後更ニ他中隊ト協力シテ終局迄戰闘ヲ繼續シタリ(明治三十八年五月二十六日付)

野戰砲兵第一聯隊第五中隊 豫備陸軍砲兵軍曹

石崎健次郎(茨城縣結城郡江川村)

明治三十八年三月八日田義屯附近ニ於テ小隊長代理トシテ戰闘中左右兩側面ヨリ優勢ナル敵砲兵ノ集中火ヲ蒙リ砲車長以下多數ノ負傷者ヲ生スルヤ自ら第三砲車ヲ指揮シテ射撃ヲ繼續セシメタリ然ルニ該砲車ハ遂ニ兩車輪ヲ敵彈ノ爲ニ破壊セラレ再び射撃ヲ爲ス能ハス加之敵ノ騎兵約一中隊ハ我側背ニ迫ル此時ニ際シ軍曹ハ第三砲車ノ砲手ヲシテ閉鎖機ヲ分解セシメ自ら第四砲車

第三編 部隊の活動 第十三章 野戰砲兵第一聯隊



ヲ指揮シテ敵時ニ向ハシメ其近道スルヲ極力嚴密射撃ナシ以テ敵ヲ撃退シタリ(明治三十八年五月二十六日付)

野戦砲兵第一聯隊第三中隊 陸軍看護手 米山熊太郎(長野縣上伊那郡中澤村)  
同 第四中隊 同 猪野富太郎(群馬縣前橋市桑町)

明治三十八年三月八日、ウシガンツン附近戰團ノ際機動砲兵中隊ニ屬シ三面ヨリ砲火ヲ受ケ死傷續出スルヲ彈雨ヲ冒シテ救急ニ従事シ重傷者ノ如キハ之ヲ彈藥車側ニ導テ其一時ヲ掩ヒ處置最モ敏捷ニシテ克ク機宜ニ適シ多數ノ傷者ヲ收容シタリ(明治三十八年五月二十六日付)

此日第三大隊は三臺子の圍壁破壊に任じ北稜方面の砲兵を制壓し、又歩兵の前進を援助せしが、三方面より敵の掃射を受け多大の損害を蒙り午後六時命により田義屯に引き揚げ聯隊に合せり、

九日前日來の敵は深く隠れて益々射撃を逞ふし田義屯は正に彈雨の渦中にあり、各中隊亦之に應射しつゝある中午前十時烈風沙塵を捲き、天地晦冥通視全く不可能に屬す、仍て彼我の猛射は自然中止せらる、午後一時四十分濛々たる砂塵の中點々接近し來る者あり、近ければ我が左翼歩兵の敗退せる者、さては必定敵の逆襲あらんと各隊彈丸を裝填して待つこと十五分、黃天に投影して一連の黑影現れ來る、果然敵襲「打つなッ、近く引き付けて大なる損害を與へよ、砲兵は一步も退却しない砲と運命を共にするばかり」とは期せずして我が放列線に起りし叫聲なりき、やがて秒一秒刻一刻其影は判明に小銃火は雨下す、沈黙を守る我砲兵は時分はよしと機關砲彈を發射し曳火彈を雨下すれば、敵亦之に和し一面田義屯の村落は火災を起し西風に煽られて炎烟天をこがし修羅の巷もかくやと思ふ計り、

彈雨の渦中にあり

砲兵は退却しない

遂に撃退

健闘約二十分にして之を撃退するを得たり、午後五時敵は更に逆襲を決行せしが之を沮止したり、十日朝來砲火亦猛、午後二時三十分に至り敵の大縱隊北方に退却を始め連々縮々として絶えず、聯隊の全部は之に榴彈銃鐵彈を雨下す、砲彈の落下する所大群四散し混雜する光景愉快なり、敵砲兵は退却援護の爲め陣地を變換し約四十門の砲を以て我を射撃せしが程なく退却せり、午後四時歩兵は前進を始め、聯隊は黃昏に至り射撃を中止せり、翌十一日敵を追撃して趙家窩棚に至り茲に部隊の整頓を終る、

### 第十一節 滯陣及凱旋

奉天會戰後聯隊は師團の北進に伴ひて法庫門外の地に轉進し、新城堡大三家子小三家子附近に宿營せしが、平和の克復を見るに至り明治三十九年一月中旬宿營地を發し、車行舟行日を重ね、同二月五日迄に衛戍地に歸着し同十一日の紀元節を以て復員完結せり、時に聯隊幹部の組織左の如し、

野戰	聯隊長 大佐 兵頭 雅譽	第一大隊長 少佐 森 下 義 央	第一中隊長 中隊長 井出川 新太郎	第一小隊長 少尉 淺田 健太郎
砲兵	副官大尉 山本 光 照	副官大尉 島 田 七 内	第二中隊長代理 中尉 三 好 新 三	第二小隊長 中尉 特務曹長 森原 市 彦
兵	一等軍醫 安島 進 平	大隊長	第三中隊長 中尉 押小路 實 英	第三小隊長 中尉 特務曹長 田島 清 作
第 三 編 部 隊 の 活 動			第四中隊長代理 中尉 福地 德 太 郎	第四小隊長 中尉 特務曹長 伊集院 右 八 木 島 勝 造

第十三章 野戦砲兵第一聯隊



砲兵第二旅團は第二師團砲兵連隊より八隊を編成し、野戦砲兵第六連隊は第十師團砲兵連隊より八隊を編成し、第七師團砲兵連隊より八隊を編成する。

第一聯隊 幹部		二等軍醫 山崎 眞	二等獸醫 角田 松兵衛
第二大隊	大尉 須藤 注連吉	副官中尉 伊東 廉三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第三大隊	中尉 第五中隊長 河合 銈彦	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第四大隊	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第五大隊	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第六大隊	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第七大隊	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第八大隊	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第九大隊	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三
第十大隊	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三	中尉 第六中隊長 林 貞三

### 第十四章 野戦砲兵第十六聯隊 (千葉縣國府臺)

◎第一節 征途◎第二節 旅順本防禦線攻圍の準備◎第三節 旅順第一回總攻撃◎第四節 部分攻撃に參加す◎第五節 第二回總攻撃後旅順に於ける行動◎第六節 奉天會戦に於ける聯隊◎第七節 海陸及凱旋

#### 第一節 征途

明治三十七年五月十四日午後六時十分聯隊は動員を令せらる、即時準備に着手し同二十一日動員完結出征の日を待つ、同七月十九日衛戍地出發用品に集合し同二十六日より土洋九外四隻の輪送船に分乘して解纜、同三十一日より八月二日に亘り大連灣に上陸を終る、時に聯隊の幹部は左の如し、

聯隊長 中佐 成田 正峰	第一大隊 大隊長 少佐 山川 丈三郎	第二大隊 大隊長 少佐 伴 正雅	聯隊 段列 段列長 大尉 黑崎 延次郎
--------------	--------------------	------------------	---------------------

副官大尉 岩田 富士太郎	副官中尉 荒藤 義勝	副官中尉 田口 秀弘	中尉 岩佐 圓助
一等軍醫 堀川 兼三郎	第一中隊 大尉 宮地 八郎	第四中隊 大尉 浪花 喜代造	少尉 淺井 勇
二等軍醫 内田 順三	中尉 宮岡 誠	中尉 飯田 清三	
見習醫官 中村 時太郎	少尉 井田 盤楠	同 榑本 岡次郎	
二等獸醫 田熊 庫十郎	同 近藤 貞雄	少尉 酒井 敬次	
同 四之宮 直次郎	第三中隊 大尉 吉田 延市	第六中隊 大尉 原口 初太郎	
見習獸醫 川村 重	中尉 黒岩 三郎	中尉 殿島 宗親	
上等主計 古河 久榮	同 山本 寅三郎	同 妹尾 克哉	
	少尉 澤 淳	少尉 金山 郁二	

#### 第二節 旅順本防禦線攻圍の準備戰

聯隊は上陸後直に旅順方面に前進し、八月六日より甲子山屯高地に於て陣地を構成しつゝありしが、同十三日夜より西泥河子南方高地に陣地を占領して第一師團高崎山附近の戦圍に参加せり、同十四日は降雨霏々射撃の效果充分ならざりしが翌十五日榴彈を以て迅速射撃をなし、遂に歩兵第十五聯隊をして高崎山を占領せしめたり、

同十七日より大迫少將の指揮する我が砲兵第二旅團(砲兵第十六、同第十七、同第十八聯隊)は甲子山屯東南高地一帯に陣地變更をなす、聯隊はその左翼たり、

高崎山附近の戦圍



### 第三節 旅順第一回總攻撃

八月十九日第一回總攻撃は開始せらる、聯隊は前面の諸砲臺に對し試射し翌二十日第一大隊は一七四高地攻撃を援助して之を占領せしめ、次て聯隊は龍眼北方角面堡及水師營南方堡壘の攻撃を援助す、我歩工兵の突撃數回に及びしも遂に成功を見ず、越えて二十二日第九師團の攻撃正面に援助射撃を行ひ、其盤龍山東西砲臺を占領するに當ては第一中隊井田小隊は東砲臺を第二大隊は西砲臺を猛射して功あり、二十三日望臺の占領に努力し翌日且砲臺の占領を援助せしが並に成功せざりき、第一大隊は昨夜千家莊西方高地に陣地を変更す、

成田大佐

八月二十五日以來軍は正攻法を用うるに決し攻路作業を開始せるを以て、聯隊は之を妨害する敵砲兵の制壓に従事せり、九月一日松樹山より發射せる十五珊の巨彈第二大隊の陣地に炸裂し、飯田中尉戦死原口大尉田口中尉負傷せり、同十日四十七密海軍砲第四小隊の編制成り岩佐中尉之を率ひ第一師團長の隷下に入る、同十四日大迫旅團長第二軍參謀長に榮轉、成田中佐は一時旅團長代理を山川少佐は聯隊長

成田大佐(正條)は明治十三年士官學校幼年生徒となり、同十六年士官學校に入り同十九年砲兵少尉に任ぜらる、爾來野戰砲兵第三聯隊付同副官同中隊長の諸職を経、累進して同三十年十月少佐に任ぜられ野戰砲兵第六聯隊大隊長に補せらる、三十一年一月近衛砲兵聯隊大隊長に轉じ三十六年四月中佐に任じ東京陸軍兵器支廠長に補せらる、三十七年一月二十二日免本職野戰砲兵第十六聯隊長に補せらるやがて出征三十八年四月十九日砲兵大佐に任ぜられ凱旋後野戰砲兵第十三聯隊長に補せらる、鹿兒島縣鹿兒島市の人、

代理を命課せらる、

### 第四節 部分攻撃に参加す

九月十九日第一大隊は第九師團の龍眼北方角面堡攻撃、第二大隊は水師營南方高地砲臺團、岩佐小隊は二〇三高地の攻撃を援助し、前二者は之を攻略するに至る、十月九日第九師團の二龍山腹散兵壕の占領を援助し、又十一日岩佐小隊は中村旅團の松樹山腹鐵道線路奪取を援助し、死傷續出するに拘らず猛射を續行し並に成功を見る、同十五日第一中隊宮岡小隊を龍眼角面堡西方眼鏡陣地に第三中隊黒岩小隊第六中隊妹尾小隊を水師營北方高地に前進せしめ、浪花大尉は以上三小隊の指揮に任じ、他は舊陣地にありて翌十六日第九師團正面鉢巻山及二龍山中腹散兵壕の左半部奪取を援助し、其の目的を十二分に達成せしめたり、同二十五日陣地を眼鏡陣地及水師營北方高地に移し、翌二十六日第九師團の二龍山斜堤、第一師團の松樹山中腹散兵壕占領を援助し奏效、同二十九日松樹山中腹散兵壕の恢復攻撃を援助し其目的を達したり、

### 第五節 第二回總攻撃後旅順に於ける行動

九月三十日旅順第二回總攻撃は開始せられしも成效を見ず、十一月三日海軍陸戰隊の十二听砲二門

旅順第二回總攻撃

第三編 部隊の活動 第十四章 野戰砲兵第十六聯隊



旅順第三  
回總攻撃  
略二〇三攻

旅順開城

遼陽に集  
中す

當聯隊に編入第二大隊長青田少佐の指揮に屬す、同十六日四十七番第五小隊の編制成り塚本中尉指揮の下に第九師團長の麾下に入る、同二十日第九師團の二龍山砲臺強襲偵察を援助し其目的を達せしめたり、同二十一日第三中隊山本小隊を松樹山中腹歩兵第二聯隊第四歩兵陣地の線に進出せしめたり、十一月二十六日聯隊は旅順第三回總攻撃に参加し特に山本小隊の近距離射撃の効果顯著なりき、此總攻撃不成功に終るや軍は攻撃目標を二〇三高地に轉ず、聯隊は擧て同高地の背面を射撃し同二十七日より十二月五日に至り屢々敵の増援隊を潰亂せしめたり、殊に第一大隊は有利の位置に陣し其効果著大なりき、聯隊は友隊と共に感狀を授與せらる、爾來岩佐小隊は第一師團の三里橋北方高地占領戰（同六日）聯隊は第十一師團東嶺冠山北砲臺爆破（同十八日）第九師團二龍山砲臺爆破（同二十八日）第一師團松樹山砲臺爆破（同三十一日）に際し全力を擧て援助射撃を行ひ皆功を奏せり、

明治三十八年一月一日第九師團の望臺攻撃を援助し奏功、翌二日旅順途に開城す、

### 第六節 奉天會戰に於ける聯隊

一月十四日鹵獲野砲を以て戦利砲中隊を編成す、

同十六日北進の途に就き、材料は長嶺子より汽車にて輸送し人馬は陸行し同三十一日全部遼陽に集中を終り「タテブシフ」附近に宿營す、二月三日龍灣に轉進し旅團は第九師團長の指揮の下に入り、堀大尉の指揮する戦利砲中隊は秋山支隊に配屬を命せられ以て戦機の熟するを待つ、

奉天會戰

孤坨子の  
激戦

沙嶺堡

李官堡

名譽の死  
傷將校

二月二十七日奉天戰役開始島田少佐の指揮する第一大隊は第九師團前衛司令官平佐少將の指揮に屬し北進の途に就く、翌二十八日房身地の敵騎を撃攘し尙敵を東荒地に追撃し多大の損害を與へたり、尋て大蓮花池にある敵騎兵團の攻撃に参加す、翌三月一日四方臺を猛撃し更に二日第九師團の北三臺子孤坨子等の激戦に加り、殊に孤坨子附近に於て第三中隊は状況切迫發射をなすに至り、山本中尉以下多數の死傷者を出せり、

聯隊（第一大隊）は旅團下にありて二十七日以來北進せしが、三月三日第一第七師團の中間に位置し沙嶺堡に於て敵の總隊隊たる第十六軍團を迎撃し之を驅逐せり古澤主計以下死傷少からず、又同日戦利砲中隊は大房身に於て秋山騎兵團と共に敵支隊の南下を沮止せり、

同四日第九師團配屬の第一

大隊は張士屯附近に位置し李官堡攻撃に参加せり、大隊は猛火を以て敵前に放死を布けるを以て敵彈發飛雨下して島田少佐戦死し松川大尉之に代り其他下士卒の死傷續出す、翌日も亦攻撃を續行せし

名譽の死傷將校	
大隊長 旭五功四少佐 島田 尚 尉	張子屯戰死 東京市本郷區本郷四丁目八番地
中隊長 旭四功五大尉 原口 利太郎	李家屯負傷 福岡縣糟屋郡青柳村
大隊副官 旭五功五同 田口 秀 弘 同	石川縣河北郡中口村
小隊長 旭六功五同 黒岩 三 郎 同	東京市牛込區若松町五八
同 同 山本 寅三 郎	大阪市南區塚谷中町三一
同 同 飯田 清三 郎	東京市神田區四小川町三ノ九
同 同 塚本 周次 郎	愛知縣東春井郡小野村
同 同 中尉 淺 井 勇	張子屯負傷 愛知縣幡豆郡御嶽村
段列小隊長 同 中尉 淺 井 勇	張子屯負傷 東京市四谷區信濃町十
中隊長 同 中尉 淺 井 勇	張子屯負傷 東京市四谷區信濃町十
小隊長 同 少尉 荒川 信次 郎	四臺子負傷 名古屋市古渡町二八六



が遂に成功せざりき、

五日聯隊(第一大隊缺)は旅團と共に第九師團に代て李官堡を攻撃せる第七師團の攻撃を援助せしが遂に効果を見ず、命により夜暗を利用して三十河子に轉進せり、六日午前八時第九師團は大石橋にて敵の大集團の逆襲を受け苦戦中との報に接し、全旅團を擧げて猛火を集中し遂に之を沮止したり、此日第一大隊も亦勇敢に奮戦し第三中隊長淺井中尉は重傷を受け遂に腹せり、又戦利砲中隊は平羅堡に敵騎を驅逐せり、

同日未明聯隊全部は岡上に出で、尋て約二千米突の開濶地を高力屯に前進し第一師團の攻撃目標たる造化屯及第七師團の攻撃目標轉濶橋を猛撃して占領に歸せしめ、翌八日八家子の攻略を援助し第一大隊を殘置して大石橋に轉進し、翌九日第七師團に屬して四臺子附近に陣地を占領す、此日南風砂塵を捲き百米突以上を通視するを得ず、僅に敵信管頭により射距離を決定し三臺子附近に散布射撃を行へり、翌十日聯隊(第一大隊缺)は更に陣地を進めて三臺子及大寒屯を攻略し、昨夜來北陵に包圍せられし歩兵第二十五聯隊を救援す、正午頃より敵は退却を

造化屯轉濶橋

武進強き將校

四臺子

武進強き將校

- 旭三功三 大佐 成田正峰 (鹿兒島)
- 旭三功四 中佐 山川丈三郎 (滋賀)
- 旭四功四 同 伴正雄 (高知)
- 同 少佐 青田幸吾 (東京)
- 旭四功五 同 畑直隆 (岐阜)
- 同 同 吉田延市 (山口)
- 同 大尉 宮地八郎 (兵庫)
- 同 同 浪花喜代造 (岡山)
- 同 同 黒崎延次郎 (栃木)
- 同 同 松川武徳 (大分)
- 同 同 岩田富士太郎 (岐阜)
- 同 同 廣瀬鈔藏 (愛知)

第一大隊

戦利砲中隊戦況

聯隊將士の壯烈

始む依て追撃射撃を施行し翌十一日石佛寺方向に轉進し五家子に滞在せり、

第一大隊(長、浪花大尉)は九日第三屯の敵を攻撃して驅逐し、尋て同地に進出して翌十日追撃射撃を續行し、十一日高力屯に翌十二日より王家窩棚に滞在す、

戦利砲中隊は八日鐵爐舖附近に於て敵騎を潰亂し、更に好心臺に據れる歩兵約二中隊を撃退して北進し、十日敵を追撃しつゝ石佛寺方向に轉進し同十二日十字泡口把芽蓮子鐵爐舖等の敵砲を制壓し、十四日チウク山に據る敵砲兵を撃退し、更に騎兵を驅逐して陽午堡子に前進せり、

同十四日聯隊(第一大隊缺)は旅團に復歸し得勝臺に移り隊伍の整頓に着手す、同日第一大隊亦復歸し茲に奉天の會戦を終る、旅團及下士卒數名は乃木軍司令官より左の感状を授與せられたり、

野戦砲兵第二旅團

三月七日轉濶橋及遺家屯附近ノ戰團ニ於テ第七及第九師團ノ攻撃意ノ如ク進涉セザルニ際シ最初岡上附近ノ陣地ニアリシ旅團ハ

第三編 部隊の活動

第十四章

野戦砲兵第十六聯隊

- 同 同 宮岡誠 (東京)
- 同 同 荒藤義勝 (茨城)
- 同 同 岩島宗親 (鹿兒島)
- 同 同 岩佐圓助 (福岡)
- 旭六功五 同 妹尾克哉 (群馬)
- 同 中尉 酒井敬次 (佐賀)
- 同 同 井田盤楠 (東京)
- 同 同 奥居重俊 (滋賀)
- 同 同 金山郁二 (愛知)
- 同 同 近藤貞雄 (同)
- 同 同 並木千代三 (東京)
- 同 同 伊藤梅吉 (東京)
- 同 同 眞龍繁信 (宮城)
- 同 同 柴山隆 (愛知)
- 旭五功五 同 細谷新吉 (茨城)
- 旭六功六 同 加治屋顯浩 (鹿兒島)



白己ノ危險ヲ顧ミズテ敵ノ猛火ヲ冒シ約二千米突ノ開闢地ヲ前進シテ其全部ヲ高力屯附近ノ陣地ニ移シク集團砲火ノ威力ヲ發揚シ以テ該攻撃ノ奏効ニ至大ノ援助ヲ與ヘ又十日第九師團ノ東場上攻撃ニ方リ旅團ノ一部アル野戰砲兵第十八聯隊第二大隊ハ敵陣ヲ冒シ約千五百米突ノ距離ヲ前進シ敵前僅ニ五百米突ノ地ニ位置シ以テ該師團ノ攻撃ヲ容易ナラシメ且優勢ナル敵ノ逆襲ニ對シ全力ヲ揮テ之ガ撤退ニ努メタリ以上ノ諸動作ハ最モ勇敢ニシテ其功績偉大ナリト認ム(明治三十八年三月十二日付)

野戰砲兵第十六聯隊第三中隊 豫備陸軍砲兵軍曹 腰塚 染吉(群馬縣勢多郡東村)

明治三十八年三月二日中隊彈藥小隊長服部中北三番子北方戰團ノ際終始放列線内ニ在リテ戰況ヲ觀察シ榴霰彈ノ補充最モ必要ナルヲ認メ之ヲ各彈藥車ヨリ集メ且ツ搬送ノ法ヲ講シ以テ其補充ヲ遺憾ナカラシメ同月四日張士屯ニ於テモ遠距離ヨリ臂力ヲ以テ彈藥ヲ補充スルノ已ムヲ得ザルニ當リ猛火ノ中ヲ奔馳シ部下ヲ督勵シテ迅速射撃ヲナスニ遺憾ナカラシメ翌五日以降同中隊小隊長代理トナリ數次ノ戰團ニ於テ巧ニ小隊ヲ指揮シ爲メニ中隊ノ射撃ヲシテ至大ノ功力アラシメタルハ其動作沈勇機敏ナリトス(明治三十八年五月二十六日付)

野戰砲兵第十六聯隊第一中隊 陸軍砲兵上等兵 森 喜代松(東京市深川區三好町)

明治三十八年三月二日奉天附近瀋陽子ノ戰團ニ於テ正面ノ敵ト交戦中俄然敵ノ砲兵側面ニ現ル、ヤ一時惶懼タル戰況ニ陥リタリ此時一番砲手ト協力シテ迅速ニ目標ヲ變換シ有利ニ砲撃ヲ繼續セリ又造化屯及郭七屯ノ戰團ニ於テ砲車長ト爲リ他ノ砲手二人ヲ督勵シ彈雨ノ中ニ在テ從容トシテ射撃ヲ指揮シ當時一等卒ノ身ヲ以テ下士ノ職務ヲ行ヒ遺憾ナカラシメタリ其動作勇敢機敏ナリトス(明治三十八年五月二十六日付)

野戰砲兵第十六聯隊第一中隊 陸軍砲兵上等兵 荒井 喜平(栃木縣上都賀郡北押原村)

明治三十八年三月四日奉天附近瀋陽子屯ノ戰團ニ於テ優勢ナル敵砲兵數處ヨリ猛烈ナル射撃ヲ爲シ我砲兵死傷算ナク光景慘憺ヲ極ムルニ當リ奮テ砲車長兼照準手トナリ前額負傷セルニ拘ラズ他ノ砲兵一人ト力ヲ協シテ射撃ヲ繼續シ以テ友軍ノ進出ヲ援助シテ努メ遂ニ敵砲兵ヲ沈黙セシメタリ其動作勇敢ニシテ功績顯著ナリトス(明治三十八年五月二十六日付)

野戰砲兵第十六聯隊第三中隊 陸軍砲兵上等兵 小島 福松(栃木縣上都賀郡栗野村)

明治三十八年三月二日以降奉天附近三番子張子屯大石橋等ノ戰團ニ於テ毎次率先集中火ヲ冒シ煙硝ヲ衝キテ彈藥ヲ搬致シ之レガ爲メ砲車ハ始終必要ノ彈種ヲ得以テ發射ノ時機ヲ失セザラシメシ動作ハ勇敢機敏ナリトス(明治三十八年五月二十六日付)

三月十六日戰利砲中隊は營盤及老邊に進出して敗敵を追撃し、尋て遼河右岸河吉牛条青堆子の線に前進す、又戰利砲中隊が友隊と共に乃木軍司令官より授與せられたる感狀左の如し、

戰利砲中隊ハ秋山少將ノ指揮ニ屬シ三月三日大房身附近ノ戰團ニ於テ優勢ナル敵ヲ攻撃拒止シテ軍ノ左側背ヲ安全ナラシメ遂ニ擊攘シテ多大ノ損害ヲ與ヘ以テ軍ノ作戰ヲ容易ナラシメタリ其功績顯著ナリト認ム依テ茲ニ感狀ヲ授與ス(三月十二日付)

第七節 滯陣及凱旋

四月十六日聯隊は遼河右岸紅具堡に轉進、五月四日法庫門に宿營を轉ず、五月二十二日第二大隊は第七師團長の指揮下に後双山子に、聯隊(第二大隊缺)も亦六月十五日同指揮下に入り、關家屯に轉進し更に第二の計畫に移らんとするの時、九月十五日休戰條約成り尋て平和克復、明治三十九年二月下旬大黃家嶺を發し二月十九日衛戍地着、同二十四日復員完結せり、時に聯隊の幹部は左の如くなりき、

聯隊本部	第一大隊	第二大隊	聯隊段列
聯隊長中佐 成田正峰	大隊長少佐 堀直隆	大隊長少佐 青田幸吉	段列長大尉 塚本周次郎
副官大尉 岩田富士太郎	副官中尉 井田榮楠	副官中尉 酒井敬次	少尉 菱田次三郎

第三編 部隊の活動 第十四章 野戰砲兵第十六聯隊



一等軍醫 堀川兼太郎	第一中隊	大尉 宮岡誠	第四中隊	大尉 三木善太郎	同 加藤 務
三等軍醫 倉科相次	中尉 中村志録	中尉 並木千代三	中尉 根本八之介	少尉 細谷新吉	
同 宇都木勝平	同 眞籠繁信	少尉 根本八之介	同 細谷新吉		
一等軍醫 四ノ宮直次郎	少尉 大日方宅三郎	同 細谷新吉			
三等軍醫 川村重	同 酒井武男	第六中隊			
同 伊澤一亮	同 酒井武男	大尉 廣瀬鈔藏			
三等主計 長野彦太郎	第三中隊	中尉 金山郁二			
	大尉 松川武徳	同 木本益雄			
	中尉 奥居重俊	少尉 岡定六			
	同 伊藤梅吉	同 加治屋顯浩			
	少尉 柴山隆				

五七〇

### 第十五章 野戰砲兵第十七聯隊 (千葉縣國府臺)

◎第一節 征途◎第二節 營城子及長嶺子附近の戰闘◎第三節 高崎山附近の戰闘◎第四節 第一回總攻撃後旅順方面に於ける行動◎第五節 牛莊及黑溝寨附近の戰闘◎第六節 奉天會戰に於ける聯隊◎第七節 遼陣及凱旋

#### 第一節 征途

明治三十七年五月鴨綠江の戦捷を耳にしたる後二旬其の十四日午後六時十分聯隊は動員令を受領し準備を整ふ、七月七日衛戍地出發征途に上り、宇品より因幡丸外五隻の御用船に乘組み祖國を離れ同二十四日より二十七日に亘り清國大連灣に上陸を終る、

聯隊本部	第一大隊	第二大隊長	聯隊段列
聯隊長砲兵大佐 横田宗太郎	大隊長砲兵少佐 市橋乙吉	大隊長砲兵少佐 入江元義	段列長砲兵中尉 丸山 豊
副官砲兵大尉 河野 義雄	副官砲兵大尉 古 谷 清	副官砲兵中尉 須藤平三郎	砲兵少尉 小野 安臣
一等軍醫 長峰 健一郎	第一中隊	第四中隊	同 寺戸 八郎
二等軍醫 武部 孫太郎	中隊長同中尉 小池 八十次	中隊長同大尉 飯森 亥三郎	見習軍醫 小池 宗八
一等軍醫 馬杉 直太郎	小隊長同 松井 喬	小隊長同中尉 兒井 正一	同 小山 助三郎
一等軍醫 鈴木 潤八	同 同少尉 伊東 政喜	同 同中尉 立野 純介	
一等主計 吉 敏 積	同 同 西村 迪雄	同 同少尉 大村 知言	
	第三中隊	第六中隊	
	中隊長同大尉 堀 直 隆	中隊長同大尉 山ノ内 起	
	小隊長同中尉 新井 豊吉	小隊長同中尉 大江 靜雄	
	同 同少尉 田中市五郎	同 同中尉 甲藤 竹雄	
	同 同 秋田 米吉	同 同少尉 平城 盛年	

#### 第二節 營城子及長嶺子附近の戰闘

時に双喜瀧安子嶺附近に敵と相對峙せる我軍は、戰機正に熟し來る七月二十六日を以て攻撃開始の事に決せるを以て、聯隊は二十五日其上陸を終れる部分より前進を始め、炎暑を冒し嶮路を越え急行して後收城頭に達す、二十六日午後敵火の下に西砂崗子西方丘阜上に陣地を占領す、午後二時四十五分より三四二高地の敵砲兵に向て猛火を集中し砲戰約三時間に亘り之を沈黙せしめたり、夜半陣地を

第三編 部隊の活動 第十五章 野戰砲兵第十七聯隊

五七一

三四二高地



双葉溝攻  
撃

于大山砲  
撃

高崎山及  
一七四砲  
撃

營城子南方に進め天明と共に野砲第一第十八聯隊と協力して敵砲兵を猛撃す、敵亦熾に應戦し我死傷相續くに拘らず、勇敢に健闘し遂に我右翼歩兵は郭家屯を占領せり、此夜陣地を郭家屯に移し命を待つ、二十八日午前七時半頃敵兵の動搖を見る、即之に猛射を注ぎ尋で敵火を冒して前進し金龍寺溝を経て午前十一時頃双葉溝高地に逼進し該地を守備する敵を砲撃す、敵は我が砲火と歩兵の突撃に依り遂に退却せり、時に段列及後れて上陸せし聯隊の一部も急行して來會し聯隊長は茲に其全兵力を掌握するを得たり、翌二十九日休養士氣旺盛なり、  
同三十日夜間に乘じ長嶺子方面に進出して陣地占領、拂曉團山子鳳凰山附近一帯の高地に據れる敵を砲撃せしが、敵は一二發を應射したるのみにて退却す、依て第九師團前面の于大山を猛撃し敵を潰亂に陥らしめたり、此夜山洞堡に宿營し爾後の準備を整へつゝあり、

### 第三節 高崎山附近の戦鬪

八月十三日より第一師團高崎山附近の攻撃は開始せらる、聯隊は翌十四日未明宿營地を發し拂曉胡家屯北端に達するや、敵より疾風射を受け陣地の偵察困難を極む、時に降雨沛然として至る各中隊は此天與の恩雨を利用して陣地に就き、第一大隊は小東溝南方高地に、第二大隊は標高一七四高地に向ひ射撃を開始す、敵亦應射し就中一七四高地西方鞍部にある砲兵最優勢を占む、此日猛雨屢々至り展望の便を缺く、彼我共に雨霧るゝを待ちては射撃を交換すると十有餘時間、翌十五日前日の任務を續行し午前九時三十五分小東溝東方一三二高地の敵兵動搖の兆あるや、之に榴彈榴散弾を雨下し遂に之を占領せり、而も一七四高地は防備堅固なるを以て攻撃効を奏せざりき、

### 第四節 第二回總攻撃後旅順方面に於ける行動

旅順第一  
回總攻撃

第一師團  
總攻撃

松樹山中  
腹散兵壕  
攻撃

八月十九日旅順第一回總攻撃は開始せらる、聯隊は胡家屯に陣地を選定し主として友安旅團の一七四高地攻撃を援助し、亦二〇三高地に向ひ砲撃を行ふ、同二十日一七四高地陥落するや、翌二十一日より二十四日に亘り中村旅團の水師營南高地及山本旅團のナマコ山攻撃に對し援護射撃を行へり、  
九月十九日第一師團は單獨總攻撃を開始し、ナマコ山及二〇三高地を攻撃す、聯隊は右兩高地を猛射しつゝあり、同二十日に至りナマコ山は中央隊の占領する所となりたるも、二〇三高地の敵は頑強に防戦を繼續し二十二日に及ぶ、我砲兵隊は全力を擧て猛射猛撃を加へしが遂に成功せざりき此間甲藤大尉戦死す、(竹雄、高知縣土佐郡湖江村)  
十月二十六日入江少佐は部下第二大隊を提げて第一師團の隸下に入り、松樹山攻撃隊の同山中腹散兵壕の奪取に援助し又第六中隊は之を妨害する敵に對し制壓射撃を行ひ、其他は松樹山及二龍山を砲撃し遂に目的を達するに至る、同二十九日午前五時該散兵壕は敵の逆襲を受け奪返さる、同日午後左翼隊は恢復攻撃を行ふ、仍て第六中隊は孔家屯第一第二砲臺に對し、後八里庄にある第四中隊は松樹山及白玉山方向の敵砲兵に對し、砲撃を開始し、午後二時我歩兵の目的を達するを見て砲火を集中せり、



十月三十日軍の第二回總攻撃は開始せらる、此日及翌三十一日聯隊は左翼隊の松樹山攻撃を援助し我歩兵の攻撃を妨害する敵砲兵の制壓に任じたり、此夜第四中隊の一小隊を砲壘に進出せしめ専ら松樹山の銃眼及野砲破壊に任じたり、而も此攻撃は成功せざりき、爾來同様の姿勢にありて彈丸を有利に節用し、或は友隊の工事保護或は銃眼の狙撃交通の妨害、敵の工事妨害に榴彈射撃をなし、効力顯著敵をして大に肝膽を寒からしめたり、

### 第五節 牛莊及黑溝臺附近の戦闘

十一月十六日聯隊は北進の命に接し、同十九日より材料は汽車輸送人馬は陸行し十二月三日全部遼陽に集中す、爾來同南門外に宿營したり、今や穴居的攻城戦を脱し快活なる野戦に移らんとす面目一變士氣旺盛、

一月十日牛莊敵襲の報あり翌十一日第一大隊は市橋少佐指揮して津川支隊に屬し沙河停車場及達道を経て前進し、寒氣を冒し難路をたどり翌十四日午前四時二十分八家子に開進す、時未だ暗暝將に露營の夢を結ばんとするの頃、砲數門を有する敵騎約三百三又河を渡れりとの報に接し支隊は此敵を迎撃すべく前進を起せり、午前七時五十分我が歩兵は敵と遭遇して銃火を交ふ、大隊は八家子北端に放列を布置し先づ我が左翼に向ひし敵騎百二十を砲撃して潰亂に陥らしめ、尋て第一中隊をして尙其左方に出でし敵を猛射せしめつ、主力は三又河西端第二陣地を占領し、新立堡城方面に進出せし敵騎

の大集團に疾風射を加へ之を禽奔獸置せしめたり、仍て更に前進中追撃中止の命に接す、爾來大隊は暫く牛莊附近にありて齋藤少將の指揮下に入れり、

一月二十五日優勢なる敵は、黑溝臺沈且堡を襲撃し激戦中であり、聯隊(第一大隊缺)は二十六日午前七時宿營地出發、高家屯を経て前進中第五師團長の指揮に屬すべき命を受け、南臺平家溝子を経て二十八日午前四時大臺北方約一千米突にある野戦砲兵第五聯隊の右翼に放列を布く、此間降雪紛々寒氣凛烈飯盒内の飯粒凍りて雪を噛むが如くなりき、拂曉攻撃歩兵の突撃を援助する目的を以て柳條口圍壁及掩壕に對して砲火を開く、暫くにして敵兵の退却するや射撃速度を増加して猛烈なる砲撃を加ふ、午前九時十分我歩兵は柳條口を占領せりとの報に接し更に李家窩棚附近に射口を轉じ、且其増加隊に曳火彈を雨注し之を沮止せり、正午第五師團の右翼は李家窩棚韭菜河子北方に向て前進を初めたるを以て、其攻撃點に迅速射を加ふ、此間敵も亦熾に我を射撃し、有効なる曳火彈は我陣地を蓋ひ、大隊副官平城中尉以下損害少からず、尋て師團長の命を受け黑溝臺を砲撃せしが敵勢頑強容易に目的を達するを得ず、かくて午後八時に至り砲撃を中止し砲床に露營せり、翌二十八日未明第八師團は全力を擧て大夜襲を決行し黑溝臺を占領せり、聯隊は午後四時第八師團の總豫備隊となり古城子及老橋附近に宿營し、尋て二月二日柳條口東南地隙に陣地を構築し、交通路及輕氣球の射撃に努めつゝあり、

### 第六節 奉天會戦に於ける聯隊



沙嶺堡の  
戦況

二月二十七日奉天會戰開始、八日以来遼陽西方四里黃泥窪に集合し準備を整えつゝありし聯隊は、同日旅團の戦闘序列に入り北進の途に就き、老簿大蘭坨子甸家屯長崗子蘇家安木崗子を経て三月二日午後九時猛火を冒して沙嶺堡に着し村落内に露營す。

同日午前八時五分猛烈なる砲火を冒して沙嶺堡北端に陣地を構成す、同十五分敵歩兵約二大隊正面を以て我左翼を包圍しつゝ前進し来る、此に於て砲火を開き此敵を射撃せしが敵は頑強に前進を繼續し遂に六百乃至八百米突に肉薄せり、程なく歩兵隊到着し漸く之を撃退す、同九時四十分約一聯隊の敵は約一千五百米突に、又同十一時三十分三千米突の廣正面を有する敵歩兵は藍山臺東北方より前進し來りしが、全聯隊は急射を行ひ之を潰亂せしめたり、此間敵火亦猛烈を極め第二回の逆襲には第二大隊長三卷少佐中隊長丸山大尉負傷し飯森大尉代て大隊の指揮をとりしが幾もなく胸部貫通の重傷を受く、而も屈せず指揮をとり敵兵退却するに至りて初めて戦線を退けり、又大隊副官平城中尉(盛年、長崎縣南高來郡島原村の人)は高粱堆積上に在て着弾觀側中、敵曳火彈の爲に壯烈なる戦死を遂ぐ其他損害少からず、正午頃より北風砂塵を捲き咫尺を辨せず、敵は之に乗じ死屍約四百を遺棄して退却せり。

死傷續出  
苦戦

野戰砲兵第十七聯隊第六中隊 陸軍砲兵一等卒 河野 愛 輝(山梨縣西八代郡上九一色村)

明治三十八年三月三日沙嶺堡戦闘ニ於テ所屬中隊敵ノ目撃ヲ避ケル爲メ徒歩シテ陣地ニ進入スルニ當リ其發見スル所トナリ猛烈ナル銃砲火ヲ受ケ人馬多ク死傷シ進入困難ナルヲ先頭ヨリ第二ノ砲車ニ在リテ自モ亦大膽部ニ貫通銃創ヲ被リ俄然地上ニ倒レタルモ直ニ起立シ人ヲシテ之ヲ知ラシメズ強テ跛行シテ陣地ニ進入シ放列ノ布置ヲ終ヘタリ明治三十八年五月二十六日付

李官堡砲

大石橋、  
造家屯、  
八家子の  
砲撃

武運強き  
將校

三月四日沙嶺堡を發し前民屯を経て午後二時四十分後民屯に達す、此時第七師團は李官堡攻撃中にあり、聯隊は午後四時十分より砲撃を開始し猛射を加へたるも敵勢頑強容易に退かず、翌五日更に攻撃を續行し、全旅團及砲兵第七聯隊は一齊に猛火を集中せしも、尙功果を見ざりき、此夕命令に接し三家子に轉營す、同六日大石橋に進出し逆襲し來る敵兵を猛撃して退却せしめ、午後第二大隊は小塞屯附近に散布射撃を行ひ、迅速射を以て轉灣橋西方無名部落を占領して苦戦中なる第九師團の歩兵を援助したり、翌七日岡上に進出し造花屯附近の敵砲兵を射撃せしが、午後二時三十分高力屯に前進すべき命を受け散眼に曝露せる約三千米突の開濶地を猛進せり、時に敵の集中火を蒙り死傷續出するにも拘はず豫定の地點に放列を布き高力屯東方露面砲兵及造花屯の圍壁に據れる敵歩兵を猛射す、我歩兵は此援助に據り突撃を決行し造花屯を占領せり、翌八日陣地を造花屯東側に移し全力を舉て八家子を猛撃し敵を擾亂せしめ此夜同地に露營す、翌九日五臺子に轉進す、此日午後烈風砂塵を捲き天地晦暝、且田義屯附近に於て敵襲を受けたるが爲め陣地に進入するを得ざりき。

三月十日未明五臺子を發し午前四時田義屯に至り

第三編 部隊の活動 第十五章 野戰砲兵第十七聯隊

武運強き將校

- |          |               |
|----------|---------------|
| 旭三功三砲兵大佐 | 横田宗太郎(岩手)     |
| 旭三功四同    | 深堀猪之助(長崎)     |
| 同        | 中佐 入江光義(島根)   |
| 旭四功四同    | 少佐 木村戒自(三重)   |
| 同        | 同 松尾清英(佐賀)    |
| 旭四功五同    | 同 菅野保之進(宮城)   |
| 旭五功四同    | 同 工藤大吾(熊本)    |
| 旭五功五同    | 同 飯森玄三郎(石川)   |
| 同        | 同 井出川 新太郎(大阪) |
| 同        | 同 河野 義雄(石川)   |
| 同        | 同 丸山 豊(鹿児島)   |
| 同        | 同 小池八十次(福岡)   |
| 同        | 同 須藤平三郎(一)    |

五七七







平佐支隊に属しチウチウ山に向ひ前進せしが、同地に據れる敵は漸次退却したるを以て西小河口に露營す、十六日支隊の編組を解かれ旅團に復歸す、あゝ二週日の久しき連日長距離の行軍に堪え難戦苦闘を重ねたる奉天會戦は茲に一段落を告げたるなり、

### 第七節 滯陣及凱旋

奉天戰後聯隊は軍の北進に伴ひ法庫門の線に進出し、同地東方約一里半なる大小下堡二臺子泡子沿高力屯附近に分屯せしが、九月中旬休戦となり明治三十九年二月上旬露營地を出發し、二月十二日大連灣より古倫母九外三隻に分乘し同二十日より二十三日に亘り歸營同三十日復員を命ぜらる、

聯隊本部	第一大隊	第二大隊	聯隊段列
聯隊長大佐 横田宗太郎 副官大尉 種田年足 一等軍醫 森川修 三等軍醫 小山助三郎 一等獸醫 鈴木瀧八 三等獸醫 福原吉之助 三等主計 沼野溟平	大隊長少佐 工藤大喜 副官中尉 田中市五郎 第一中隊 中隊長大尉 小池八十次 小隊長中尉 伊東政喜 同 同 西村迪雄 同 少尉 渡邊吉太郎 第三中隊 中隊長大尉 竹内辰三	大隊長少佐 菅野保之進 副官中尉 小野安臣 第四中隊 中隊長大尉 立野純介 小隊長中尉 入交勝一郎 同 同 高木幸一 同 少尉 矢島稜威雄 同 同 吉田俊藏 第六中隊	段列長大尉 平澤益雄 小隊長少尉 佐野光雄 同 同 福地良七 二等軍醫 武部徳太郎 三等獸醫 小池宗八

小隊長中尉 田中勇雄	中隊長大尉 兒井正一
同 同 秋田米吉	小隊長中尉 可兒才市
同 少尉 田中謙次郎	同 同 平山繁
	同 同 横山八十治

## 第十六章 野戰砲兵第十八聯隊 (千葉縣四ツ街道)

◎第一節 征途◎第二節 旅順要塞前進陣地の戦闘◎第三節 旅順本防線攻撃の準備戦◎第四節 旅順第一回總攻撃に於ける聯隊◎第五節 部分攻撃に参加す◎第六節 旅順第二回第三回總攻撃に於ける聯隊◎第七節 二〇三攻略及旅順閉城◎第八節 奉天會戦に於ける聯隊◎第九節 滯陣及凱旋

### 第一節 征途

明治三十七年五月十四日午後六時十分聯隊は動員を命ぜらる、動員第一日は翌十五日なり、將卒意氣軒昂勵精事務を處理し同二十一日動員完結、五月二十六日侍從武官宮本砲兵大佐(照明)來隊 陸下の難有思召を傳えらる、準備茲に成り即七月六日聯隊長陸軍砲兵中佐本莊全之指揮の下に四ツ街道の營舎を出發し、七月十日字品に着し同十九日博多丸以下五隻に分乘して祖國を離れ、同二十四日大連灣に上陸を終る、

### 第二節 旅順要塞前進陣地の戦闘

第三編 部隊の活動 第十六章 野戰砲兵第十八聯隊



聯隊は大連上陸以後晝夜兼行後革鎮堡を経て七月二十六日午前七時三十分後牧城駒の東方二千米突の海岸に集合を終り、營城子の東北方に放列を敷き第一師團右翼隊の攻撃を援助し、圍屏溝金龍寺溝附近の敵砲兵を砲撃せり、然れども未だ其成果を收めざるを以て陣地附近に露營し、二十七日營城子西南に陣地を變更し未明より午後四時以後に亘り郭家屯停車場附近の砲兵、牧城駒南溝標高二四四高地及郭家屯附近標高二七一高地の防禦歩兵を猛撃し交戦約十時間に亘れり、本日の戦況に於て敵砲兵は全然隱蔽陣地に據り其瞰制を受けたるを以て比較的多大の損害を蒙り、戦死伍長川田新次郎上等兵鈴木百三郎一等卒駒宮房吉知久岩太郎百瀬壽美一、負傷大尉岩永敬信以下士卒十三名、然れども士氣旺盛なり

同二十八日未明陣地を小磨子附近に進め、双臺溝狼烟臺附近の敵を射撃す、敵は朝來退却を始めしを以て此夜双臺溝に露營す、同三十日長嶺子南方約五百米の豫定陣地に進出し、風風山子大山周家屯附近の敵歩兵を射撃し潰亂に陥らしめたり、

### 第三節 旅順本防禦線攻圍の準備戦

八月一日以來石灰窪子にあり火石稜西南高地に攻圍陣地構成に従事せしが、同十四日未明出發敵火と風雨を冒して胡家屯附近の陣地に就き、第一師團の攻撃を援助し主として高崎山及一七四高地に對して射撃し日没に至る、此夜陣地を若干前進せしめ、翌十五日午前七時三十分より射撃を開始し攻撃三次に及び第一師團左翼隊は高崎山を占領せり、仍て聯隊は射撃を中止し此夜周家屯に至る、然るに連日の降雨はいたく車輛の運動を妨げ遂に一車輛少くも五駟多きは十駟を繋駕するに至れり、此間戦死一等卒鈴木臺次郎負傷卒三名、

### 第四節 旅順第一回總攻撃に於ける聯隊

八月十八日夜總攻撃開始の爲め、聯隊は甲子山屯附近に陣地の構成をなし翌十九日拂曉前迄に準備を完了せり、時に聯隊の幹部は左の如し、

聯隊本部	第一大隊	第二大隊	聯隊段列
聯隊長中佐 本莊全之	大隊長少佐 安樂城大造	大隊長少佐 木田伊之助	段列長大尉 衣斐直夫
副官大尉 佐藤利	副官中尉 大西丙子	副官中尉 犬丸勇夫	少尉 兒島謙吉
一等軍醫 片山秀俊	第一中隊	第四中隊	少尉 多田 駿
三等軍醫 長谷川二郎	中隊長大尉 斐直夫	中隊長大尉 鈴木善治	
一等軍醫 久我優祐	小隊長中尉 竹内辰三	小隊長中尉 小原正夫	
三等軍醫 佐藤右太吉	同 中尉 中西毅一	同 少尉 山室宗武	



一等主計 北川 明弘	同 少尉 生田 三郎	同 中尉 在 岡 守 三
第三中隊	中隊長大尉 島 田 尙 爾	第六中隊
小隊長中尉 安 立 猛	小隊長中尉 門 馬 五 助	
同 少尉 越 石 秀 雄	同 少尉 吉 田 忠 真	
	同 同 古 川 榮 三	

水師營南  
高地一七  
樹山七松  
四高地砲

爾後の経  
過

午前九時十五分射撃を開始し、案子山東方一帯の地に向ひ日没に至る迄緩射を持續せり、  
 八月二十日天明と共に射撃を開始し、主力を以て水師營南方砲壘圍並に松樹山及其附近を射撃し、  
 又一部を于大山頂附近に出し第一師團右翼隊の標高一七四の攻略を援助し、尙龍眼北方の角面堡を射  
 撃せり、此日敵の十五彈彈屢々我が放列線に落下せしも損害比較的多大ならず、  
 翌二十一日より二十四日に亘り依然前任務を續行し番團克く力め、且盤龍山巨砲壘附近を射撃し、  
 第九師團の攻撃を援助せり、此戰闘に於て戰死中尉在岡守三軍曹皆川光藏伍長加藤幹一郎上等兵大川  
 文吉、負傷少尉山室宗武以下五名に上る、  
 八月二十五日より九月十八日に至る間、聯隊は椅子山案子山及其以東の諸砲壘に向ひ破壊及制壓射  
 撃に任じ、特に一部を以て望臺及其附近交通路の狙撃に任せり、  
 九月十六日我が砲兵第二旅團長陸軍少將大迫尙道第二軍參謀長に補せられ、砲兵大佐永田龜少將に  
 昇進して其後を襲ぐ、

第五節 部分攻撃に参加す

第一師團  
總攻撃

九月十九日午後一時第一師團は總攻撃を開始し同五時前後に於て砲撃最盛なり、聯隊は水師營南方  
 堡壘圍及龍眼北方砲壘に向ひ極力援助射撃を執行せり、歩兵は六時前後屢々突撃を執行せしが奏効を  
 見ず、日没に至り全く射撃を中止したり、

同二十日攻撃は依然繼續せらる、聯隊は専ら水師營南方堡壘の突撃(歩兵第三聯隊の)を援助する爲  
 め該砲壘に砲火を集中し、其他突撃歩兵に害を及ぼす敵砲の制壓に任せり、我が歩兵第三聯隊は午前  
 九時水師營南高地砲壘を占領せしが聯隊は依然射撃を續行し日没に及べり、

同二十一日龍眼北方砲壘は昨夜(第九師團に)、ナマコ山は今朝(歩兵第一聯隊に)占領せられたり、聯  
 隊は依然案子山より松樹山二龍山に亘る敵砲の制壓に任せり、聯隊の戰死伍長坂本三平一等率皆井三  
 五郎負傷下士卒九名、

九月二十二日より十月二十九日に至る間、聯隊は前任務を遂行し専ら松樹山二龍山砲壘に向ひ破壊  
 及制壓射撃を加へたり、此間十月九日第九師團二龍山中腹散兵壕の奪取、同十一日第一師團松樹山麓  
 鐵道堤奪取、同十六日第九師團二龍山腹の塹壕及鉢卷山攻撃に援助射撃を行ひ、又第二大隊は第十一  
 師團に屬せられ同十六日大孤山に向へり、同二十六日第一師團は松樹山中腹散兵壕奪取、第九師團の  
 二龍山攻撃に對し援助射撃を行へり、此期間負傷卒僅に三名、

爾後の経  
過



第六節 旅順第二回第三回總攻撃に於ける聯隊

旅順第二回總攻撃

十月三十日拂曉我が攻城砲兵は二龍山松樹山砲臺に砲火を集中す、聯隊は午後零時三十分砲火を開き松樹山二龍山及其中間諸堡壘砲臺に猛射を加ふ、又第十一師團に屬せし第二大隊は午前九時より東鷄冠山北砲臺及其以南の諸砲臺に向ひ砲撃を開始し、共に緩射を持續せしも各砲臺共歩兵の突撃は奏効せず、依て攻撃を再興するに決し午後五時の頃射撃を中止せり、我が損害は戦死一等卒田崎清一郎負傷卒一名、

爾後の経過

十月三十一日より十一月二十五日に至る間、聯隊は陣地を水師營南方より九三高地に亘る線に變更し(第二大隊は大孤山にあり)、専ら松樹山二龍山及東鷄冠山北砲臺の對壕作業を援助し、又教場溝附近の交通路妨害及旅順市街に向ひ威嚇射撃を行へり、十一月十六日水師營南方高地に陣地を變換し、松樹山外岸穹窿の爆破及第九師團の二龍山輕砲線の突撃に援助射撃を行ふ、

旅順第三回總攻撃

十一月二十六日第三回總攻撃開始せらる、聯隊は松樹山二龍山東鷄冠山北砲臺及其附近の堡壘砲臺に向ひ砲火を開始し、破壊殺傷の目的を以て緩射を持續し午後六時に至れり、而も各方面の突撃は盡く奏効せざりき、聯隊の戦死者砲兵伍長關川房吉、負傷者中尉小原正夫同赤澤仲次特務曹長佐藤好松外卒七名、

第七節 二〇三攻略及旅順開城

二〇三の牽制

同直接砲撃

爾後の経過

第三回總攻撃失敗に歸するや軍は全力を擧て二〇三高地を攻撃す、聯隊は松樹山砲臺三里橋附近を射撃して牽制に任せしが、同三十日直接攻撃援助に任じ十二月四日に至る迄約一中隊の砲を以て二〇三高地を砲撃し、一面は松樹山を砲撃して之を牽制せり、十二月五日尙砲撃を續行し殊に一中隊を以て該高地及背後の増援部隊を射撃し、午後二時十五分該高地の占領に歸するや終夜其背面を射撃して敵の逆襲を遮断し、尙一中隊を以て松樹山方面に對し牽制射撃を加へ、其占領を確實ならしむるに努めたり、我戦死者一等卒根岸萬藏、聯隊は他の參與部隊と共に滿洲軍總司令官より威狀を附與せらる、十二月六日より同十七日に至る間、聯隊は前任務を續行すると共に益々猛烈に交通路妨害及市街に向て威嚇砲撃を施行せり、同十八日第十一師團の東鷄冠山北砲臺胸牆爆破には朝來援助射撃に任じ日没に至る迄射撃を續行せり、爾來前任務を續行せしが同二十八日第九師團二龍山胸牆爆破には二龍山重砲線及松樹山砲臺に向ひ射撃を加へ之を援助せり、戦死伍長高崎初太郎負傷卒三名、聯隊は二龍山攻撃に對し他の參與部隊と共に威狀を附與せらる、

同三十一日第一師團の左翼は松樹山砲臺胸牆爆破を行ふ、聯隊は全力を擧げて此の攻撃を援助し午前十時三十分砲臺内部に突入するや、其後方地區に向ひ射撃を變更せり、午後第九師團の烏帽子山附近に對する攻撃を援助す、此日松樹山攻撃に對し聯隊は他の參與部隊と共に滿洲軍總司令官より威狀を



旅順開城

遼陽附近  
集中

奉天會戰  
開始

附與せらる、

明治三十八年一月一日第二大隊は聯隊の指揮に復歸す、此日第九師團の烏帽子山附近攻撃に對し援  
助射撃を行ふ、翌二日旅順遂に開城す、砲兵旅團は第一に北進すべき命に接し専ら其準備に汲々たり、

### 第八節 奉天會戰に於ける聯隊

一月十五日頃より旅順出發陸行又は汽車輸送を以て北行し、輸送隊は同十七日遼陽附近に集中を終  
り巴家崗子に宿營す、陸行隊は一月下旬より二月初旬に亘りて到着せり、此間一月二十五日黒溝臺の  
敵襲には遼陽の守備に任じ、尋て歩兵第十八旅團長の指揮に屬し小北河附近の守備に任じ二臺子にあ  
り、

古今獨歩の大野戰たる奉天會戰は二月二十四日より開始せらる、聯隊は同二十七日宿營地出發小北  
河老簿を経て吳家崗子に着す、時に聯隊の幹部左の如し、

聯隊長中佐 本莊 全之	第一大隊長少佐 小野寺 益	第二大隊長少佐 山之内 赴	段列長大尉 犬丸 勇夫
副官大尉 佐藤 利	副官中尉 長風 勝吉	副官中尉 足立 猛	少尉 大島 源吉
一等軍醫 片山 秀俊	第一中隊	第四中隊	三等軍醫 長谷川 二郎
三等軍醫 柴久 衛	中隊長大尉 衣野 直夫	中隊長大尉 鈴木 善治	三等軍醫 山口 好基

一等隊醫 佐藤 右太吉	小隊長中尉 中野 毅一	小隊長少尉 中村 次郎
三等隊醫 久我 優祐	同 少尉 宮崎 第三	同 少尉 水津 易吉
三等主計 山脇 一耶	同 少尉 吉崎 菊之進	同 中尉 吉田 忠真
	第三中隊	第六中隊
	中隊長大尉 小川 政雄	中隊長大尉 門馬 五助
	小隊長中尉 越石 秀雄	小隊長中尉 吉川 榮三
	同 少尉 加藤 左馬	同 少尉 兒島 鋪吉
	同 少尉 竹内 敬二	

藍山臺の  
砲臺

武運めで  
たき將校

二月二十八日拂曉宿營地出發徐家窩棚に敵を砲撃し、三月一日蘇家安に敵を擊退し、次第に北進し  
て同日沙嶺堡着同三日藍山臺附近の敵より猛射を受く、聯隊は直に放列を敷き午前八時砲火を開き  
全力を擧て藍山臺及雅姐崗の歩砲兵を射撃し午前十一時前後に至り敵をして遂に退却の餘儀なきに至  
らしめ、直に追撃射撃を加へ正午全く敵影を認めざ  
るに至り射撃を中止せり、此日聯隊は敵歩兵を距る  
近きは約千米突其砲兵には約二千六百米突の距離に  
於て對戦し一時猛烈なる射撃を蒙りしが、上下一致  
勇敢に動作し敵をして武器彈藥諸器具及器具の多大  
を遺棄して退却するに至らしめたり、

三月四日同地發、嚴家荒後民屯を経て前民屯に着

第三編 部隊の活動 第十六章 野戰砲兵第十八聯隊

武運めでたき將校	勳三功三 中佐	本莊 全之 (兵庫)
	勳四功四 少佐	山之内 赴 (鹿児島)
	同	三卷 伸三 耶 (山口)
	勳五功四 同	鈴木 善治 (神奈川)
	勳五功五 大尉	衣野 直夫 (高知)
	同	小川 政雄 (東京)
	同	藤本 雅彦 (福岡)
	同	佐藤 利 (静岡)
	同	門馬 五助 (福岡)



し、五日李官堡の攻撃に參與して敵に猛射を加へ、六日大石橋に進出して敵の逆襲を沮止せしが、敵砲兵の認識頗る困難を極め殊に馬圈子方向より側射を受け著しき苦痛を感せり、

同日大石橋を経て間上南側畑地に陣地を占領し、轉灣橋附近の敵砲兵を砲撃す、午後三時更に高力屯に陣地を移し射撃を開始し死傷相續ぐにも拘らず勇敢に健闘し、第一大隊は轉灣橋東北方の敵を撲滅し、第二大隊は轉灣橋の圍壁に向ひ多大なる破壊孔を穿ち攻撃歩兵に援助を與へたり、同八日造家屯南端に陣地占領を終り、午前十時五分より第九師團の八家子攻撃第七師團の小集屯攻撃を援助せり、同九日午前二時八家子附近に陣地占領を終りたるも急に四家子方向に轉進すべき命を受け午後一時五家子に着す、時に第一師團は三蓋子ウングンに於て苦戦中であり、然れ共當時烈風砂塵を捲き咫尺を辨せず止むなく陣地占領を見合せたり、翌十日午前七時郭七屯南側に進出し第九師團の郭三屯攻撃を援助す、午前八時三十分郭三屯占領後直に第二大隊を

五九〇

勳五功五	大尉	犬丸勇夫(東京)
同	同	金子蕭藏(新潟)
勳六功五	同	村田辰三(静岡)
同	同	三月司吉(廣島)
同	中尉	中西毅一(同)
同	同	吉田忠真(東京)
同	同	生田五郎(神奈川)
同	同	足立猛(高知)
同	同	吉川榮三(佐賀)
同	同	兒島庸吉(愛知)
同	同	宮崎第三(徳島)
同	同	中村次郎(東京)
勳五功五	少尉	入部敬三(鹿児島)
同	同	吉崎菊之進(山口)
同	同	大島源吉(山梨)
同	同	水津易吉(島根)
勳三功五	同	青山幸孟(岐阜)
勳四功五	一等軍醫	丹治敬祐(福島)
勳五功五	一等軍醫	佐藤右太吉(愛媛)
勳六功五	二等軍醫	長谷川二郎(長野)

郭三屯に前進せしめ第九師團の攻撃を援助せしむ、時に敵の猛火を受け戦況悲慘を極めたりき、乃木軍司令官より附與したる左の感状を見れば思半ばに過ぎん、

野戦砲兵第十八聯隊第六中隊 豫備陸軍砲兵軍曹中島長太郎(埼玉縣南埼玉郡南埼玉村)  
陸軍砲兵軍曹 小川 英(千葉縣印旛郡陸田村)

明治三十八年三月十日所屬中隊郭三屯ニ進入スルニ當リ優勢ナル敵歩兵僅カニ五百米突テ隔テ、東揚上土壁内ニ在リテ猛烈ナル射撃ヲ爲シ加フルニ敵砲四十餘門ノ射撃ヲ受ケ我兵死傷相續ケテ身砲車長トシテ迅速精確ナル射撃ヲ以テ連ニ土壁ヲ破壊シ途ニ敵歩兵ヲシテ三百有餘ノ屍ヲ留メテ敗走セシメ且ツ敵砲火ノ爲メ部下多ク死傷シ存スル者砲手一人ニ過ギザルニ至ルモ之ヲ奮勵シテ射撃ヲ繼續シ以テ敵散ヲ潰亂ニ至ラシメタリ(明治三十八年五月二十六日付)

敵は朝來鐵道線路附近を北退し午後に至り益々其兵數を増加せり、是と同時に其退却防護の砲兵も益々増加し約七十門を算するに至り、第二大隊の陣地附近に落下せし彈丸のみを數ふるも約三千に上る、我將士は一般に沈着此等の砲兵を制壓しつゝ、敵の大縦隊に向ひ力の限り彈丸のあらん限り猛射を加へ多大の損害を與へたり、此間の行動により左記二名は乃木軍司令官より感状を附與せらる、

野戦砲兵第十八聯隊 豫備陸軍砲兵曹長 川井今朝松(山梨縣東八代郡錦村)  
同 一等卒 水石永盛(山梨縣北巨野郡駒城村)

明治三十八年三月八日造化屯戰團ノ後彈藥檢査閉上ニ到着セズ且ツ同所ノ彈藥大隊本部之ト連絡ヲ失シ彈藥ノ補充ヲ爲シ能ハズルヲ翌九日終日終夜凍寒饑渴ヲ忍ビ未知ノ地ヲ奔走シ閉上五蓋子間ノ諸部ヲ搜索シテ遂ニ翌十日縱列ノ所在ヲ明ニシ之ヲ四蓋子ニ誘導シ以テ彈藥ノ補充ヲ繼續シ砲兵聯隊ヲシテ潰走スル敵兵ニ對シ有力ナル射撃ヲ爲スコトヲ得セシメタリ(明治三十八年三月十六日)



五月二十六日付

同十一日未明陣地に就き天明を待つ、敵は已に昨夜退却して亦隻影を見ず、依て郭三屯を出發し翌十二日椰子屯着茲に隊伍の整頓を終る、去月二十七日以來聯隊の損害は、戦死第一大隊長少佐小野寺益中尉越石秀雄少尉加藤左馬伍長金子助次郎一等卒増子兼次郎同中村嘉四郎同小和瀬順(傷死)同星野梅吉同栗屋國雄(傷死)同北澤長三郎(傷死)、負傷中佐本莊全之(二回幸に微傷)三等軍醫柴久衛特務曹長石井平三郎同平山盤雄(二回)同大岡小四郎以下士卒六十名に上る、又旅團は三月十二日附を以て乃木軍司令官より威状を授與せられたり、

### 第九節 滯陣及凱旋

奉天會戰後聯隊は軍の北進に伴ひ三月十三日饒家堡に、四月十四日河路海に、五月四日四臺子同二十日頭臺子に宿營を轉す、其間人馬の訓練殊に補充兵の教育に意を用ひ或は緊急集合野外演習射擊演習を施行し行動準備を整備せり、然るに九月十五日休戦の命を實施し十月十七日平和克復の通報を受け明治三十九年二月を以て衛戍地に凱旋せり、

國家可使數十年無材智之士、而不可一日無氣節之臣。

方孝儒

## 第十七章 東京灣要塞砲兵聯隊 (神奈川縣横須賀市)

◎其一 野戰重砲兵第一聯隊◎其二 徒歩砲兵第一聯隊◎其三 野戰重砲兵第二聯隊◎其四 徒歩砲兵第三獨立大隊◎其五 徒歩砲兵第一獨立大隊◎其六 第一機關砲隊◎其七 第二機關砲隊

忠誠なる我が同胞は今も尙記憶に存するならむ、旅順に於ける巨砲の威力は頗る猛烈を極め敵將ステッセルをして到底防ぐべき方法なしとまで絶叫せしめ、又奉天の大野戦に於ては戦史上未曾有の巨砲を配備し、而も其轟音の絶大なる其炸裂力の猛烈なる唯敵を震懾せしめたるのみならず、遠く歐米の戦術家を驚倒せしめたるを、加之面憎きまで猛威を逞うせる機關砲は彼我兩軍に配屬せられて、其一門は能く歩兵一個中隊に敵すと稱揚せられしことを、此の極大極小の砲煩こそ共に要塞砲兵の操縦せし者なれ、

日露覺醒開くるや、我が東京灣要塞砲兵聯隊よりも亦數個の重砲隊及機關砲隊を編成して征戰に従へり、素より忠勇なる日本國民、其の赤誠報國の至情は隊により人により異なる筈なれども、巨大なる砲煩を操縦するの困難と輕砲を携へて敵前近く肉薄するの危険とは、實に豫想の外にあり、而も克く任務を遂行し有終の美を濟せし將士の偉績光榮は日月と光を争ふに足る、故に先づ幹部勳績一覽表を掲げ次で各出征部隊の戦闘經過に及ばんとす、(但△は戦病死者)



第三編 部隊の活動 第十七章 東京海軍要港砲兵聯隊

五九五

大隊副官	功五旭六	同	中尉	三畑五 (磯(神奈川))	機砲付	功五旭六	同	中尉	△日比谷彦右衛門(神奈川)
大隊副官	功五旭六	同	中尉	加藤三郎(愛知)	小隊長	功五旭六	同	中尉	柏木誠一(兵庫)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	高橋拾次郎(新潟)	同	功五旭五	同	中尉	藤原藤三郎(一)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	大野徳太郎(一)	同	功五旭五	同	中尉	名川昌治(一)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	伴甲 藤(新潟)	同	功五旭五	同	中尉	鈴木安次郎(一)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	田村恒心(一)	同	功五旭五	同	中尉	大内爲喜(一)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	芳賀眞吾(福井)	同	功五旭五	同	中尉	古閑子熊(熊本)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	大橋常三郎(京都)	同	功五旭五	同	中尉	對馬一義(青森)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	愛甲與四郎(鹿児島)	同	功五旭五	同	中尉	郷竹三(岐阜)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	澁津剛一(一)	同	功五旭五	同	中尉	渡邊長太郎(東京)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	坂部祐四郎(東京)	同	功五旭五	同	中尉	小池九一(同)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	松井孝平(愛知)	同	功五旭五	同	中尉	川上義弘(神奈川)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	南 部 健(一)	同	功五旭五	同	中尉	折井 衛(長野)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	竹下佐太郎(石川)	同	功五旭五	同	中尉	高橋勉次(山形)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	西濱司馬吉(福島)	同	功五旭五	同	中尉	諏訪悦治(長野)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	△小泉利三郎(山形)	同	功五旭五	同	中尉	宮村基三(福島)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	遠藤耕造(福島)	同	功五旭五	同	中尉	八木源作(群馬)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	久村 樹(福島)	同	功五旭五	同	中尉	△島橋文次郎(東京)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	高橋誠造(神奈川)	同	功五旭五	同	中尉	△佐藤清治(宮城)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	峯尾甲一(東京)	同	功五旭五	同	中尉	杉原孫十郎(愛知)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	山脇正旗(東京)	同	功五旭五	同	中尉	沖中 信一(山口)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	宮館純一(青森)	同	功五旭五	同	中尉	津守徳太郎(一)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	倉崎 清(島根)	同	功五旭五	同	中尉	土方 英(一)
大隊副官	功五旭五	同	中尉	上村清太郎(東京)	同	功五旭五	同	中尉	
大隊副官	功五旭五	同	中尉	藤原 敦(茨城)	同	功五旭五	同	中尉	

聯隊長	功三旭三	砲兵大佐	江 藤 鋪(熊本)	中隊長	功五旭五	同	大尉	佐藤勇之助(兵庫)
聯隊長	功四旭三	同	御影地友那(一)	同	功五旭五	同	大尉	久野周信(愛知)
聯隊長	功四旭三	同	△酒井甲子郎(三重)	同	功五旭五	同	大尉	三浦光治(一)
聯隊長	功四旭三	同	乙部尚志(福井)	同	功五旭五	同	大尉	小橋清見(東京)
聯隊長	功四旭三	同	清水駒次郎(愛知)	同	功五旭五	同	大尉	古賀眞一(一)
聯隊長	功四旭三	同	上島 登重(長野)	同	功五旭五	同	大尉	野村 久(石川)
聯隊長	功四旭三	同	和田新蔵(大阪)	同	功五旭五	同	大尉	根 村 聰(千葉)
聯隊長	功四旭三	同	和村米作(埼玉)	同	功五旭五	同	大尉	松田正孝(一)
聯隊長	功四旭三	同	△大林角太郎(一)	同	功五旭五	同	大尉	金子直彦(一)
聯隊長	功四旭三	同	山下彌太郎(岐阜)	同	功五旭五	同	大尉	松本貞一(高知)
聯隊長	功四旭三	同	福田 英(東京)	同	功五旭五	同	大尉	猪股久雄(青森)
聯隊長	功四旭三	同	河合隆夫(大阪)	同	功五旭五	同	大尉	大江 敏雄(新潟)
聯隊長	功四旭三	同	角 徳一(廣島)	同	功五旭五	同	大尉	岩崎通敏(島根)
聯隊長	功四旭三	同	永島武夫(一)	同	功五旭五	同	大尉	野々村 繁(島根)
聯隊長	功四旭三	同	△渡邊三四郎(山口)	同	功五旭五	同	大尉	△杉浦周三(愛知)
聯隊長	功四旭三	同	宮澤勇一(静岡)	同	功五旭五	同	大尉	△林 静 枝(東京)
聯隊長	功四旭三	同	西郡菊之助(福島)	同	功五旭五	同	大尉	小林 謙三(神奈川)
聯隊長	功四旭三	同	渡邊好延(山口)	同	功五旭五	同	大尉	浅井卯吉(東京)
聯隊長	功四旭三	同	細田初一(福井)	同	功五旭五	同	大尉	山本三代治(福島)
聯隊長	功四旭三	同	根岸五藏(長崎)	同	功五旭五	同	大尉	岩谷 義助(一)
聯隊長	功四旭三	同	奥村 鈕吉(愛知)	同	功五旭五	同	大尉	中根 壽郎(一)
聯隊長	功四旭三	同	江頭友次郎(賀)	同	功五旭五	同	大尉	網島久次郎(一)
聯隊長	功四旭三	同	野 尻 殿(兵庫)	同	功五旭五	同	大尉	小林 堅治(鳥取)
聯隊長	功四旭三	同	中島 榮吉(一)	同	功五旭五	同	大尉	宮本 勝 衛(長野)
聯隊長	功四旭三	同	長澤政治(一)	同	功五旭五	同	大尉	健(神奈川)

五九四



中隊付	功五旭五	同	少尉 桐山 壽(福岡)	聯隊付	功七旭六	同	少尉 瀬戸崎 彌平(長崎)
同	功五旭六	同	中野 彌三郎(—)	同	同	同	出水 勇三(鹿児島)
同	功六旭六	同	藤田 末吉(福島)	同	同	同	勝田 長一(佐賀)
同	同	同	金子 毅(長野)	同	同	同	河邊 祐一(富山)
同	同	同	太田 淳(東京)	同	同	同	同

五九六

### 其 一 野戦重砲兵第一聯隊

明治三十七年二月二十三日勅員下令東京灣要塞砲兵聯隊に於て編成せられたる野戦重砲兵聯隊は、酒井砲兵中佐(甲子郎)指揮の下に横須賀より鹿児島九外七隻の御用船に乘組み、三月二十八日出帆、四月一日韓國鎮南浦に集合し更に同地に於て名も目度き勝山丸以下數隻に乗りかへ、平安道梨家浦に上陸點定島に陣地を占領射撃準備を整ふ、同三十日及五月一日鴨綠江彼岸摺鉢山の敵砲兵を猛撃して沈黙せしめ、尋て敵歩兵及九連城腰講及馬講方面に散布射撃を行ひ、敵を威壓して黒木軍の攻撃を援助せり、尋て三月二十日より鴨綠江を發し七月三日四日青泥窪に上陸を終る、

上陸後旅順方面に前進し七月廿七日より同二十九日に亘り第一第三大隊は第九師團の凹字形山攻撃第二大隊は第十一師團の大白山攻撃を援助し其砲壘掩蓋を粉碎し占領を容易ならしめ、尋て第一大隊を以て第十一師團の大小孤山攻撃第一師團の高崎山附近の戦團に參加し大に威力を發揮せり、同三十日酒井大佐は盤道西南方高地に於て負傷遂に眠せらる、江藤大佐代て聯隊長に補せらる、

八月十九日より旅順第一回總攻撃は開始せらる、第一大隊は第一師團方面の曲家屯に、第二第三大隊

初め野戦砲兵聯隊  
明治三十七年四月十日  
野戦重砲兵第一聯隊  
鴨綠江の戦に於ける  
加す

旅順方面の活動

は第九師團方面の東北溝に陣地を占め、龍眼北方高地盤龍山西舊砲壘松樹山新舊砲壘を猛撃せり、九月十九日より二十三日に亘り第一大隊はナマコ山及二〇三高地を、聯隊(第一大隊缺)は龍眼北方高地及水師營南方砲壘團に對し至威を揮ひ、二〇三を除く外之を攻略するに至る、

十月三十日開始せられたる第二回總攻撃には、聯隊は攻城諸砲兵と共に敵砲兵の制壓射撃、又夜間は敵の作業妨礙の射撃をなし其効力多大なりき、十一月二十六日第三回總攻撃開始せらる、聯隊は本防禦線各砲壘の砲撃に従事せしが軍の攻撃は各方面共不成功に終りしを以て主力を二〇三に用う、聯隊も亦全砲を此方面に轉じ第一大隊は攻撃地點二〇三を第二第三大隊は太陽溝北砲壘及五門砲壘等後方諸砲壘の制壓に任じ、爾來十二月五日に及び遂に此の天嶮の攻略を見るに至る、此より同十七日楊樹房東方約千米高地(第七師團攻撃)翌十八日東嶺冠山北砲壘(第十一師團攻撃)同二十三日西太陽溝北方高地攻路(第七師團)同二十八日二龍山攻路(第九師團)同三十一日松樹山爆破攻路(第一師團)に對し有効なる射撃を續行し並に其目的を達成せり、聯隊は二龍山攻撃の動作により威狀を授けらる、

明治三十八年一月一日後三羊頭村南方高地攻路には、鴨湖嘴砲壘西太陽溝北砲壘等を攻撃し、其後方諸砲壘を制壓し遂に其攻略を成すに至る、翌二日旅順遂に開城せり、聯隊は第三軍司令官及滿洲軍總司令官より威狀を附與せらる、

旅順開城後聯隊は遼陽附近に北進し、獨立重砲兵旅團の一部として第二軍に配屬せられ第五師團正面の三犬子に陣地を選定し奉天會戰に參加す、三月一日拂曉より長灘西南方より年魚泡及王家窩棚の

第三編 部隊の活動 第十七章 東京灣要塞砲兵聯隊

五九七

奉天會戰に於ける活動



敵砲を射撃して第五第八師團の攻撃を援助す、翌二日より軍は攻撃前進を開始せるを以て聯隊も亦陣地前進の命を受け、沈日堡大韓蓋子を経て大尼河に向ひ、同四日第五師團長の隸下に入り小倭家堡に宿營し、翌五日拂曉崖家堡東方砂山附近に陣地を構築し射撃準備を完了す、午前八時三十分砂泡子附近の敵砲兵を射撃中午前九時二十三分二壘子南方の敵砲兵我陣地を側背より射撃せり、聯隊は直に射口を之に轉ず敵は熾に疾風射を加ふるを以て觀側所砲列共多數の敵彈を受け死傷續出するにも拘らず勇敢に奮闘し、午後一時十五分全く之を撃退せり、是より先き午前十一時十分より莫家堡南方に敵砲兵現はれ猛射を加へしが、我は一部を以て之に應戦し午後五時全く敵を沈黙せしめたり、此の際第一中隊の砲手藤沼林作は勇猛果敢に健闘し、第二軍司令官より特に感状を附與せられ、聯隊長江藤大佐は此壯烈なる動作を全聯隊に布告したり、上等兵は枋木縣下都賀郡赤麻村の出身にかゝる、

野戰重砲兵聯隊第一中隊 陸軍砲兵上等兵 藤 沼 林 作

右者奉天附近ノ會戰中三月五日崔家堡附近ノ陣地ニ在リテ敵ノ砲兵莫家堡西南端ニ現レ背後ヨリ猛射スルナ直ニ砲車ヲ背轉シテ之ノト對戦セリ偶々敵砲ノ爲メニ打撲傷ヲ受クルモ勇ヲ鼓シテ操砲ニ從事シ再ビ砲創ヲ深ルモ屈セズ戰闘ヲ繼續セリ其動作壯烈ナリト認ム仍テ感状ヲ授與ス(明治三十八年三月二十日付)

三月六日前日に引き続き砂坨子西南方及莫家堡西端の砲兵を射撃し、同七日師團命令に基き東部大榆樹堡西方凹地に陣地を變更し同師團附屬の砲兵と協力して砂坨子南方敵砲兵莫家堡ミジャツプー等及鐵道橋の西南方を射撃して翌八日に及ぶ、敵も亦頑強に應戦し我が死傷少からず、同九日第一大隊は大榆樹子東端に陣地を變更して砂坨子を砲撃し以て第八師團の攻撃を援助し、又其一中隊を前進せしめ同東北方を砲撃せしめたり、同十日敵は退却を始めたるを以て聯隊は第五師團の後尾に續行し、敵を追撃して午後七時正に兵火中なる奉天停車場に到着警營せり、

奉天會戰後聯隊は軍の行動に伴ひ次第に北進して楊威櫻、老河灣英守毛屈牛糸屯古城子附近に轉營せしが、平和克復の命に接し明治三十九年二月上旬宿營地を發し、大連灣より土佐丸外三隻に乗り組み三月二日を以て横須賀に凱旋す、外征正に二年なり、

其二 徒歩砲兵第一聯隊

明治三十七年五月一日東京灣要塞砲兵聯隊に於て編成せられたる徒歩砲兵第一聯隊は、江藤大佐(鋪)の指揮に屬せられ聯隊本部及第一大隊(大隊長少佐福田英)は六月二十三日備後丸に第二大隊(大隊長少佐箕田長秀)は七月二日小倉丸に搭じて横須賀軍港出發、七月二日及十二日共に青泥窪に上陸せり、

先着せる第一大隊は直に南山戰利野砲十二門を交附せられ第一線の配備に就き、七月二十七日より同三十日に亘り野戰重砲兵聯隊長酒井大佐の指揮下に亂泥橋西北方高地の戰闘に參加せり、八月一日より全隊の前進を開始し同十七日陣地進入を終る、時恰も滿洲の雨期に際し道路泥濘濁流滔々暮舍を浸し寢るに家なく着るに衣なし、加ふるに十二珊の巨砲を運搬するなれば困難豫想の外にあり、連續七晝夜の作業に健康を害し斃るゝ者あるに至るも士氣旺盛なりき、八月五日江藤大佐野戰重砲兵聯隊



旅順第一  
回總攻撃

第一中隊  
勇者戰  
將士

巨砲の發  
射壯觀無  
比

長に轉補砲兵大佐御影地友邦代て聯隊長に補せらる。

八月十九日旅順第一回總攻撃に際し第一大隊の十二砲加農は先づ射撃を開始し茲に攻圍戰の端緒を開き、續て全砲一時に火門を開き第九師團の攻撃を援助す、全隊十二門より打ち出す巨彈は盤龍山東西の砲臺を形を失ふ迄に破壊して其攻路を容易ならしめたり、此砲戰中第一大隊の直射砲は多大の注意を敵に與へ、殊に第一中隊は集中火を受け敵彈頻りに砲側に炸裂し死傷相續ぐ、中隊長野尻大尉(慶)小隊長小泉少尉(利三部)同折井少尉(衡)は奮然起て胸牆上に登り敵に暴露して指揮を執れば、部下皆感激し戰友の頭飛び手足舞ふの修羅場にあるに係らず、照準正確始んど平時演習の操砲をなすが如く勇敢に戰闘を持續したり、當時乃木軍司令官は後方の高地にありて此の狀を望見せられ感狀を授與せらる。

徒歩砲兵第一聯隊 陸軍砲兵大尉 野 尻 殿(兵庫縣姫路市北條口)

明治三十七年八月十九日兩日旅順要塞本防禦線砲臺ノ際敵ノ集中火ヲ蒙リ死傷者續出シ兵器材料モ亦多ク破壊シ士氣將ニ衰ヘントスルヲ奮然胸牆ニ上リ嚴然部下ヲ激勵シ之レニ依リ克ク砲擊ヲ持續シ射撃ノ効力ヲ全カラシメタリ(明治三十八年五月十二日付)

九月十九日クロバトキン角面堡攻撃を援助して攻路せしめ、爾後晝夜の別なく各方面に援助射撃を續行せり、同二十七日更に二十八砲榴彈砲四門を交附せらるゝや、第二大隊をして團子山及王家甸に砲臺を構築し十月一日より砲火を開始し本防禦線各砲臺及旅順市街及港内に威嚇砲撃を行ふ、二十八砲の巨彈が天地を震撼する轟音と共に空気を鳴動して飛行する壯觀は言語に絶し、砲臺砲臺に命中するや人員材料を一掃し市街に火災を起し家屋を震動し港内の艦船に命中して其用を失はしめ、間接に敵の士氣を沮喪せしめ味方の士氣を發揚せしこと少からず、後亦二門を加ふ、

砲戰やむ  
ときなし

旅順開城

奉天會戰  
に参加す

二十八砲  
を野戰に  
使用せる  
は未嘗有

十月三十日松樹山の攻撃を援助す、十一月十五日我愛甲大尉(當時中尉)の指揮する王家甸二十八砲第二砲臺は東鷄冠山北砲臺を砲撃し其第五發目に於て敵の本防禦線指揮官コンドラレンコ將軍以下其幕僚を一撃に斃したりと、爾來攻路の進捗に伴ひ益々援助射撃の必要を感じ砲戰止むときなし、十二月十八日第十一師團東鷄冠山砲臺の奇襲、同二十八日第九師團の二龍山爆破、同三十一日松樹山砲臺の爆破を援助し又望臺附近の攻撃に參與し、又第五中隊は後三羊頭村附近の攻撃を援助し以て明治三十八年一月二日旅順の開城に至る、攻圍半歲の間聯隊は連日攻戰に従ひ大に重砲の威力を發揮せり而も將校以下戦死四十五名負傷二百二十九名に達す、

開城後二月五日より北進の途に就き沙河附近に集中し茲に聯隊は第一第二第四軍に分屬して奉天會戰に参加せり、

二月二十七日聯隊長は同本部第一第二中隊徒歩砲兵第二聯隊の二中隊及二十八砲二門を指揮して沙河停車場附近に陣地を占め第四軍前面の敵を砲撃し、殊に敵陣地の鎖鑰たる韓城堡の堅壘を猛撃して破壊せしめ、軍司令官より威狀を附與せらるゝの名譽を負へり、第四中隊は第四軍下に、第一大隊本部及第三第五中隊は第一軍に屬し、又第二大隊は第二軍に屬し大榆樹堡金家窩子大石橋に轉戦せり二十八砲の巨砲を野戰に使用せるは有史以來の偉觀にして、殊に其下漸火藥を満載せる巨彈の落下す

第三編 部隊の活動 第十七章 東亞海軍要塞砲兵聯隊



る處物として粉碎せざるなく敵をして狼狽措を失せしめ大に我攻撃力を熾ならしめたり、此戦闘に於て聯隊の損害は戦死準士官以下十九名、負傷將校以下八十六名あり、會戦後三谷子附近に駐屯し各軍に分屬せる中隊を集め戦後の整理を行ふ、

後五月に至り聯隊は編成を改め野戦重砲兵第二聯隊及徒歩砲兵第三獨立大隊に分割せらる、

### 其三 野戦重砲兵第二聯隊

聯隊は徒歩砲兵第一聯隊第二大隊の後身なり、明治三十八年五月九日編成を命せられ同二十日完結御影地大佐指揮の下に第二軍に屬し雨期の不便を冒して昌圖方面に前進し、東草唐溝及朝陽堡附近に陣地を構築して機を待つこと三ヶ月、九月下旬休戦の命に接し十月一日第一線を離れて索龍崗子附近に轉じ十月十六日平和の克復に至る、聯隊は編成後決戦の機を得ず空しく敵と對峙して將士脾胃の嘆に堪えざりしが不幸惡疫の襲ふ所となり林大尉(名は靜枝東京市小石川諏訪町に生る性温厚前途多望の好士官)以下六十名を失ふの悲境に遭遇せり、やがて三十九年の新春を迎え一月二十八日鐵嶺を發し大連より増振丸外二隻に分乘し、二月二十四日二十五日相前後して横須賀に凱旋せり、

決戦の機を得ず

惡疫に苦しむ

### 其四 徒歩砲兵第三獨立大隊

大隊は元徒歩砲兵第一聯隊第一大隊の編成換となりたる者にして明治三十八年五月九日編成を命せ

られ同十九日完成、繼がて大隊長清水中佐(駒次郎)指揮の下に昌圖附近に進出し陣地を構築して機の熟するを待ちしが、休戦の令に接し明治三十九年二月十日清水溝子を出發し、同二十一日柳樹屯より仁川丸に乘し三月二日衛戍地に歸着解散せらる、

### 其五 徒歩砲兵第一獨立大隊

明治三十七年五月一日動員下令、東京灣要塞砲兵聯隊に於て編成せられたる徒歩砲兵第一獨立大隊は、大隊長乙部少佐(尙志)指揮の下に七月一日横須賀軍港より門司丸に搭じて征途に上り、同九日青泥窪に上陸を終る、

旅順方面の戦場

七月二十六日双頂山附近に陣地を構築し、第十一師團の老坐山大白山高地一帯の攻撃を援助し、炎暑を冒し峻坂を越え陣地を變ふること六回砲火を交うる十二回に及び遂に其占領を確實ならしめたり

八月七日より第十一師團の大小孤山攻略を援護し之を占領するに至る、

八月十七日旅順第一回總攻撃に参加し、團山子に陣地を構成して東西盤龍山より東鷄冠山北砲臺を猛撃して二十三日に至る迄射撃を續行せり、時に炎熱燬くが如く屢々驟雨あり行動困難を極め、加ふるに惡疫の流行あるにも拘らず士氣極めて旺盛なりき、

九月十七十八兩日小東溝に陣地を構へ、第一師團の二〇三及ナマコ山攻撃に参加、十九日午後二時五十五分より砲火を開き、二〇三高地中腹にある掩蓋を破壊せしも敵勢頑強容易に陥落せず、爾



旅順開城

鴨綠江軍

奉天會戰  
に於ける  
聯隊

來二十三日に至る迄同高地及其後方に散布射撃を行へり、

十月十七日陣地を水師營大西溝に移す、第二回總攻撃(同三十日)には椅子山、案子山、殺前軍左營臺、砲臺、松樹山、補備砲臺を砲撃し、第三回總攻撃にも亦同一の任務を續行したり、尋で十一月二十八日より晝夜間斷なく二〇三高地の背後を砲撃し、敵の増加隊を制壓し十二月五日遂に其攻略を見る、

十二月二十八日第九師團の二龍山砲臺爆破同三十一日第一師團左翼の松樹山爆破を援護し、明治三十八年一月一日望臺の占領せらるゝや旅順市街に潰走する敵兵を砲撃せしか、遂に一月二日旅順の開城を見るに至れり、

一月十四日鴨綠江軍に編入せられ、同二十八日旅順を發し寒天を冒し氷雪を踏み長亭短樹行程百有餘里非常なる困難を排して二月二十三日河家大溝に到着直に陣地を構築したり、翌二十四日午前十時砲火を開き主として清河城南方三家子北方高地及饒頭山に於ける一帯の敵陣地に彈雨を注ぎ、歩兵の攻撃を援助し午後二時其占領を確實にしたり、大隊は更に北進し三月一日午前三時孤家子南方高地脚に陣地を占め、午前八時地塔方面の敵砲兵並に散兵壕を砲撃す、敵は地の利を占め且強固なる防禦工事を施せるを以て攻撃進捗せず、爾來八日に至る迄夜間は警戒に任じ晝間は砲火を交換しつゝありしが八日の夜に至り之を撃退せり、又此の間馬群丹方面の攻撃困難を極めしを以て一中隊を派し大馬格山を攻撃して偉大の功果を收めたり、尋で大隊は軍の北進に伴ひ漸次北方に轉進中、第十一師團の岡支隊に屬し英領城防禦陣地守備に任せし一中隊は、八月二十九日午前九時歩騎連合の敵襲を受けしが猛射

を加へて撃退せり、程なく敵の大縱隊猛烈として來襲せしが難なく之を撃退し師團長より賞詞を授與せらる、かくて大隊は福陵に駐屯する中平和克復に至り、明治三十九年二月上旬宿營地を發し柳樹屯より春日丸に搭じ同十五日横須賀に凱旋せり、

### 其六 第一機關砲隊

明治三十七年三月十四日編成の命に接し同十八日編成完結、同二十三日横須賀出發臨時汽車を以て廣島に集中を終り各歩兵部隊に配屬す、砲隊長は山下大尉(定二)なり、四月二十一日より宇品を發し五月十二日清國猴兎石附近に上陸を終る、

五月十六日十三里臺の戰鬪尋て南山の戰鬪に参加し、以來旅順前進陣地の戰鬪に移り安子嶺に鳳凰山干大山に其猛威を擅にせり、尋で旅順第一回第二回第三回總攻撃松樹山後三羊頭村附近の攻略に参加し、旅順の開城するや三十八年一月二十日旅順出發沙河方面に轉じて奉天會戰に参加し、三月二日鄧密荒に同三日沙嶺堡に同六日高力屯に九日十日田義屯及ウンガンソン三臺子に於て優勢なる敵に對し猛射を加へ能く其威力を發揮したり、此間屢々苦戦に陥りしも奮闘克く任務を全ふし部隊及小舟(權平)岡安(小兵衛)川名(清五郎)の三上等兵は名譽ある感狀を授けらる、

奉天戰後法庫門附近の團崗子に駐屯せしか、休戦の命に接し一月中旬宿營地出發同三十日横須賀に凱旋したり、



### 其七 第二機關砲隊

第一機關砲隊と同時に編成せられ相前後して清國孫家咀子に上陸す、金州南山戦闘の頃は北方の警戒に任せしを以て目さましき活動を見ざりしが尋で旅順攻圍軍に編入せられ其前進陣地の戦闘には、第十一師團に屬し六月二十六日劔山を攻撃し尋て其逆襲を挫折したり、其勇敢なる行動により第六小隊及布施伍長(文藏)山田上等兵(松藏)は感状を授與せらる、

八月十九日以後各歩兵隊に配屬して、旅順第一第二第三回總攻撃及望臺の攻撃大白山附近の戦闘に参加し、東鷄冠山北砲臺爆破に加りて敵を猛射し味方を收容し部隊の感状を受領すると四回、谷野伍長(長藏)田中上等兵(哲)又感状受領の光榮を得たり、

旅順の開城するや鴨綠江軍に編入せられ、清河城に馬群舟に第十一師團の攻撃を援助し勇名を輝せり、奉天戦後第十一師團機關砲隊と改稱せられ英領城八家子附近に駐屯せしが、同十月平和の克復を見るに至り、明治三十九年一月二日大連出帆同日横須賀に凱旋せり、

### 第十八章 工兵部隊 (東京府北豊島郡岩淵町)

◎其一 工兵第一大隊◎其二 架橋隊◎其三 後備工兵第一中隊◎其四 後備工兵第三中隊◎其五 其他の部隊

#### 其一 工兵第一大隊

動員及征

明治三十七年三月六日當大隊は動員を令せられ第二軍の戦闘序列に加はり、同二十二日屯營出發汽車行を以て同二十日廣島に集合す、

金州南山の戦闘

四月二十日字品出帆二十三日韓國鎮南浦に入港し戦機的發展を待つ、五月三日同地出帆清國盛京省猴兔石に上陸し揚陸工事並に上陸援護陣地構築に従事す、又十三里臺の戦闘に参加し砲兵陣地構築及十三里臺南方高地の防禦陣地編成に従事せり、五月二十六日金州南山の戦闘に参加し砲兵陣地構築及州城門並に副防禦破壊に従事し且突撃に參與す、特に左の二小隊長は與軍司令官より感状を賜り大に大隊の名譽を輝せり、

工兵第一大隊第一中隊第二小隊長 陸軍工兵少尉 鳥谷 秀(愛媛縣松山市三春町)

右者明治三十七年五月二十六日拂曉金州攻撃ノ際突撃隊ノ進路ヲ閉塞スルノ目的ヲ以テ敵兵ノ占據セル金州城門ノ破壊ヲ命ゼラレ下士卒以下六名ヲ率ヒ其第一門ヲ爆破シ次テ再ヒ其内門ヲ破壊シ前後其任務ヲ全フシタリ其所爲ノ勇敢ナル他ノ模範トナスニ足ル由テ其武功ヲ表彰ス(明治三十七年七月十六日付)

因に工兵上等兵飯塚長太郎氏は少尉の部下にありて直接城門の破壊に任じたり

工兵第一大隊第二中隊第一小隊長 陸軍工兵少尉 武藤 彬(千葉縣印旛郡佐倉町)

右者明治三十七年五月二十六日南山攻撃ノ際歩兵第二聯隊第三大隊ニ屬シ副防禦破壊ノ命ヲ受ケ大隊ト共ニ奮進シ地帯ノ所在ヲ探索シテ其壕穴ヲ切斷シ及監視所ヲ毀テ大隊ノ突入ヲ容易ナラシメタリ其所爲ノ勇敢ニシテ他ノ模範トナスニ足ル由テ其武功ヲ表彰ス(明治三十七年七月十六日付)

六月六日第二軍の戦闘序列を脱し第三軍の戦闘序列に入る、

第三編 部隊の活動 第十八章 工兵部隊



六月上旬より七月下旬に至る間、双臺溝附近の戦闘及同月三十日後沙泡附近の戦闘に参加し砲兵陣地の構築に任じ、續て八月中旬に至る間、攻圍線編成工事に従事す。

八月中旬より同下旬に亘る間、高崎山附近戦闘及旅順第一回總攻撃に参加し、交通路砲兵陣地構築副防禦破壊突撃并に爆撃戦に従事す。九月上旬より中旬に亘る間、二〇三高地及水師營南高地に對する對壕作業に従事し、同十九二十日師團の總攻撃には第二中隊は歩兵第一聯隊のナマコ山攻撃（寺兒溝西北高地）に第三中隊は歩兵第三聯隊の水師營南高地の攻取に協力して偉績を表はし、乃木軍司令官より感狀を附與せられたり。

工兵第一大隊第二中隊

右中隊ノ一小隊ハ明治三十七年九月十四日ヨリ六晝六夜危險ヲ冒シテ寺兒溝西北高地斜面ニ突撃陣地ヲ構成シ十九二十日敵火ノ爲メ突撃隊ノ後方連絡全ク絶エルルヤ急遽交通路ヲ掘開シテ後援部隊ノ前進ニ便シテ歩兵ヲ導キ勇往邁進シ榴彈ヲ投シテ敵ノ掩蓋ヲ破壊シ以テ突撃ヲ容易ナラシメタリ其功績顯著ナリトス（九月二十一日付）

工兵第一大隊第三中隊

明治三十七年八月九日歩兵第三聯隊ト共ニ水師營南方高地ノ敵壘ヲ攻撃スルヤ或ハ猛火ヲ冒シテ鐵條網ヲ切斷シ或ハ剛毅不屈ノ精神ヲ以テ對壕作業ニ從事シ突撃ヲ行フモノ前後數回榴彈ヲ敵壘ニ投入シ橋ヲ其外壕ニ架シ胸牆ヲ破壊シテ以テ歩兵ノ進路ヲ開キ九月二十日遂ニ敵ノ三壘ヲ陥レタリ其功績偉大ナリトス（右同）

工兵第一大隊 陸軍工兵中尉從七位 野村 重 來

（香川縣高松市內町）

明治三十七年八月二十日危險ヲ冒シテ寺兒溝西北高地ノ敵陣地ヲ偵察シテ歩兵第一聯隊ノ攻撃計畫ヲ裨益シ翌二十一日部下ヲ督勵シ峻坂ヲ潛行シ敵ノ散兵壕ニ肉薄シテ榴彈ヲ之ニ投シ其狼狽スルニ乘リ後援歩兵部隊ヲ指導シテ之ト共ニ同壕ニ突入シ身數創ヲ

蒙ルモ辱ニ風セズ激戰奮闘遂ニ敵兵ヲ潰亂セシメタリ（明治三十八年五月二十二日付）

工兵第一大隊第二中隊 陸軍工兵軍曹 林 久 雄

（長野縣下伊那郡千代村）

明治三十七年八月二十一日寺兒溝西北高地攻撃ノ際命ヲ受ケ兵卒五名ヲ率テ彈雨ヲ衝キテ敵ノ散兵壕ニ肉薄シ榴彈ヲ此ニ投ジ敵ノ狼狽スルニ乘リ後援歩兵部隊ヲ導キ之ト共ニ散兵壕ニ突入シ激戰奮闘自負傷スルモ爲メニ屈セズ敵ヲ潰亂セシメタリ勇猛果敢ノ動作ト爲ス（明治三十七年八月二十二日付）

工兵第一大隊第二中隊 陸軍工兵伍長 甘新 一 治

（長野縣北佐久郡小沼村）

同 陸軍工兵伍長 吉岡 利 長

（長野縣北安曇郡）

明治三十七年九月十九日寺兒溝西北高地攻撃ノ際歩兵先頭部隊ト共ニ猛火ヲ衝キテ先ヅ死角内ニ入り石間ヲ攀グテ敵情ヲ偵察シ敵ノ散兵壕前敵米突ノ巨砲ニ據リ榴彈ヲ投ジテ其掩蓋ヲ破リ敵ノ驚クニ乘リ壕内ニ突入シ之ヲ驅逐シタリ翌廿日更ニ頂上ノ頂砲陣地ヲ破壊シ強襲ノ奏功ニ與リテカアリ其動作勇猛機敏ナリトス（明治三十七年九月二十一日付）

工兵第一大隊 陸軍工兵軍曹 關根 照 一 郎

（埼玉縣秩父郡尾田町）

明治三十七年九月十九日水師營南方高地堡壘破壊ノ任ヲ受ケルル兵卒五名ヲ率テ猛火ヲ冒シ敵壘ニ逼リ其外壕ニ躍リ入り敵回壕彈ヲ壘内ニ投ズ是ニ於テ敵存リニ榴彈ヲ擲テ銃火ヲ集注シ酒樽石塊ヲ放下シ手兵多ク負傷シ身モ亦連ニ重傷ヲ被ルルモ爲メニ風撓モズ徐ニ傷者ヲ收容シ夜中隊ニ歸若シ外壕ノ深幅水深斜面ノ狀態等有益ノ報告ヲ爲シタリ其動作剛勇功績亦大ナリトス（明治三十七年九月二十日付）

工兵第一大隊 陸軍工兵伍長 藤尾 平 三 郎

（埼玉縣見玉郡神保原村）

明治三十七年九月十九日水師營南方高地攻撃ノ際銃砲火ヲ冒シ敵壘外壕ニ往來シテ克ク榴彈補給ノ任務ヲ盡シ又奮テ掩蔽部破壊ノ命ニ應ジ壘内ニ突入シテ其目的ヲ達シ以テ歩兵ノ進入ニ容易ナラシメ加之敵壘占領後地雷十二箇ヲ發掘シ我軍隊ノ行動ニ裨益シタリ其動作剛毅功績亦顯著ナリトス（同二十一日付）



工兵第一大隊 陸軍工兵二等卒 高木 陟(千葉縣香取郡馬場村)

明治三十七年九月一日水師營南方高地ノ敵軍ニ對シ對壕作業開始セラル、ヤ常ニ先頭ニ在テ奮勵事ニ從ヒ同月十九日該處攻撃ノ際ニハ自ら進テ斥候ノ任ニ當リ白晝猛火ノ下ニ動作シテ克ク外壕等ノ情況ヲ偵察シ尋テ壕被手トナリ前後三回外壕内ニ突入シテ壕彈ヲ擲テ以テ敵軍ノ攻略ヲ容易ナラシメタリ其動作勇猛其功績顯著ナリトス(明治三十七年九月二十日付)

十月三十日第二回總攻撃に参加し松樹山副防禦の破壊並突撃壕戰をなす、是より先き(十月八日)松樹山砲臺攻撃作業に従事し對壕及坑道作業を行ひつゝありしが、十一月七日午前十一時大隊長大木工兵大佐(房之助)は、例の通り松樹山の覆道冠塞敵前五米突の處に於て部下の作業を指揮する時、敵兵に狙撃せられ左頬部左側頸部並に右鎖骨上窩より左手の上膊外後側に貫通銃創を受け不幸其職に瘡れたり、大佐は京都府丹後國與謝郡城東村大字瀧馬の人、久しく士官學校に教官たり、明治三十一年以來當大隊長に補せられ、又旅順本攻撃開始以來始終敵軍の下に立ち寢食を忘れて部下を指揮し、對壕作業に坑道開掘に至しも遺憾なからしめ勵精盡くべき者ありしが、今や亡矣されば師團長松村中將松樹山攻撃隊長渡邊大佐初め部下に至る迄痛惜甚しかりき、工兵中佐近野鳩三代て大隊長に補せられ十一月二十八日着任せらる、中佐は熊本縣玉名郡日半村の人、夙に陸軍大學校を卒業し參謀本部出仕陸軍大學校兵學教官たり、又日清戰役に功あり、今や學術經驗豐富なる隊長を戴ける我が大隊の成功期して待つべきなり、かくて益々工事を勉め十二月三十一日松樹山胸壁を爆破し、十二分の成功を以て同砲臺を占領す、此間勇敢忠烈軍人の模範として乃木軍司令官より感狀を授けられたる者數名あり、

大木工兵  
大佐戰死

近野工兵  
中佐

勇敢なる  
工兵

工兵第一大隊 陸軍工兵特務曹長 井上 豊次郎(靜岡縣小笠原郡須賀村)

明治三十七年十一月四日以降松樹山砲臺胸墻下坑道作業ニ從事シ勇奮敵火ヲ射シ死地ヲ蹈ミ日夜坑路頭ニ立テ寢食ヲ忘レテ部下ヲ督勵シ十二月二十三日遂ニ壕彈ノ爲ニ創ヲ被ルニ至ル其動作勇敢ナリトス(同日付)

工兵第一大隊 陸軍工兵特務曹長 松井 喜市(群馬縣北甘樂郡富岡町)

明治三十七年十二月二十三日松樹山砲臺ノ偵察ヲ命ゼラル然ルニ此任務タルヤ胸墻上ニ突進シ敵ト咫尺スルニアラザレバ目的ヲ達スルコト能ハズ眞ニ至難ノ業タリ是ニ於テ特務曹長(軍曹)ハ我砲臺敵ノ哨兵ヲ制壓スルニ乘シ火線上ノ土囊線ニ奮進シ破壊孔ヨリ敵ノ哨兵ト一土囊ヲ間シテ咫尺相會スルヲ敢然身ヲ跳ラシテ火線上ニ立チ内部ヲ觀察シ其狀況ヲ報告シタル動作ハ勇敢ナリトス(明治三十八年五月二十二日付)

工兵軍曹 松本 幸佐(長野縣上水内郡南小川村)

明治三十七年十一月四日以降松樹山砲臺胸墻下坑道作業ニ從事ス抑モ該作業タルヤ最も危險ノ作業ニシテ敵ハ晝夜間斷ナク外壕内ニ壕彈ヲ投下シ或ハ胸墻下ノ哨路ヨリ屢々壕彈ヲ以テ坑路内及坑頭ヲ爆破シ運命旦夕ニ逼ルニ從容自若トシテ率先奮勵工事進捗ヲ計リシモ十二月二十三日遂ニ壕破ノ爲メ重傷ヲ負フニ至ル其動作勇敢ナリトス(明治三十八年五月二十二日付)

工兵第一大隊第二中隊

陸軍工兵伍長 塚越 源太郎(群馬縣群馬郡馬場村) 同 上等兵 見上 馬吉(神奈川縣高座郡綾瀬村)

同 青鹿 松之助(埼玉縣北埼玉郡東村) 同 並木 金次郎(埼玉縣北足立郡大和田町)

明治三十七年十一月四日以降松樹山砲臺胸墻下坑道作業ニ從事ス抑モ該作業タルヤ最も危險ノ作業ニシテ敵ハ晝夜間斷ナク外壕内ニ壕彈ヲ投下シ或ハ胸墻下ノ哨路ヨリ屢々壕彈ヲ以テ坑路内及坑頭ヲ爆破シ運命旦夕ニ逼ルニ從容自若トシテ率先奮勵工事進捗ヲ計リシモ十二月二十三日遂ニ壕破ノ爲メ重傷ヲ負フニ至ル其動作勇敢ナリトス(明治三十八年五月二十二日付)

明治三十八年一月二日旅順開城後は同地に滞在し陸海兩正面の堡壘砲臺の一部を受領整理す、同二  
十四日奉天會戰に參與する爲め旅順を出發北進し、金州亮甲店熊岳城を経て二月中旬小北河に到り、  
渾河太子河の架橋工事に従事す二月二十六日奉天會戰の爲め行動を起し、拉木河沙陀子沙嶺堡田義屯

奉天會戰  
に参加す



に於て村落防禦編成に、大石橋田義屯に於て防禦工事に従事し、又三月八日三臺子に於て壯烈なる爆薬戦、田義屯に於て友軍の收容をなせり、爲に大隊の第三中隊二小隊は歩兵第一第十五聯隊と共に感状を附與せらる(歩一戦記参照)、又爆薬投擲に任じ乃木軍司令官より感状を受領せる者左の如し、

- 工兵第一大隊 陸軍工兵上等兵 中 溝 春 吉 (東京府南多摩郡瑞穂川村)
- 同 二等卒 仁 藤 峯 吉 (神奈川県橋本町)

明治三十八年三月八日三臺子夜襲ノ際敵兵村落ノ土壁ニ據リ頑強ニ抵抗スルヲ擧ゲテ爆薬ヲ手ナリ彈雨ヲ射テ敵前ニ肉薄シ爆薬ヲ投擲シテ破墻口ヲ穿開シ以テ敵ヲ驚亂シ途ニ歩兵部隊ヲシテ其占領ヲ容易ナラシム其動作勇敢其功亦大ナリトス(明治三十八年五月二十六日付)

三月下旬抗馬臺及老邊に於て遼河の架橋、四月下旬調兵山附近に於て師團の防禦陣地の構成並に通江口に於ける遼河の架橋に従事す、

五月中旬より平和克復(十月十六日)に至る間は法庫門より小塔子を経て小大窪に至る約七里の永久道路、並に小塔子の永久橋又還陽樹附近防禦陣地編成に従事す、次て陶代屯に移る、三十九年一月十九日出發凱旋の途に就き、二月三日屯營歸着、同八日復員完結す、此間従軍せし重なる將校左の如し、

- 勳三功三 工兵大佐 大木 房之助 同 中佐 近野 鳩三 勳四功五 同 大尉 今村 外次郎
- 勳四功五 同 大尉 須永 友四郎 勳四功四 同 小須田 徳太 勳五功四 同 遠藤 新三
- 勳五功五 同 中田 鐵五郎 同 同 青山 徳太郎 勳五 一等軍醫 秋谷 靜雄
- 勳五功四 一等軍醫 吉田 正雄 勳四 一等主計 有馬 彦助 勳六功四 工兵中尉 武 藤 彬
- 勳五功五 同 中尉 野村 重來 同 同 中尉 渡 邊 辰 同 同 中島 春男

- 勳六功五 同 大木 乙彌 勳六 二等軍醫 飯田 幸三郎 勳六功五 工兵少尉 鳥 谷 秀
- 同 同 少尉 大 鈴 五 郎 同 同 少尉 丹 野 慶 三 同 同 大 石 保 之 助
- 勳六功六 工兵少尉 五十川 秀一 勳六 同 同 山 内 惣 之 助 同 同 金 子 四 郎
- 同 同 大 野 巖 同 同 同 笠 原 保 衛 同 同 小 澤 信 次 郎
- 同 同 同 銅 島 五 郎 同 同 同 坂 本 由 三 郎 同 同 三 等 軍 醫 戸 田 憐 江
- 勳五 三等主計 清 末 捨 三 (注意 たてに讀む)

其二 架橋縦列 (編成擔任工兵第一大隊)

縦列は明治三十七年三月六日の勳員令により編成を終り、脾肉の嘆を忍びつゝ板橋附近に舍營してありしが、五月二日輜重兵大尉青島正知指揮の下に新橋より汽車輸送を以て征途に就き、六月二十日宇品出發清國盛京省張家屯に上陸、七月初旬長嶺子に前進し旅順の攻圍戦に加る、八月一日より翌三十八年一月十八日に至る迄攻城工兵廠に屬し行動せり、旅順開城後奉天附近に進出し最左翼に屬し大新屯に於て敵騎を撃退し、三月十日沙河堡の南方十里河に守備中、敵の有力なる斥候を驅逐したり、次て八月以來遼河の水運に依り糧食の運搬及交通に任せしが、翌三十九年一月中旬宿營地を出發し二月五日東京着、同十一日復員を終れり、

其三 後備工兵第一中隊 (編成擔任工兵第一大隊)

旅順攻圍  
に加る  
奉天會戰  
参加



中隊は明治三十七年六月十日、津田工兵中尉(兼造)指揮の下に征途に就き、韓國北部に上陸、京義鐵道敷設及同鐵道請負に係る工事の監督に任せり、七月三日第三軍に編入せられ、青泥窪に轉じ七月十八日より同地及盤道間輕便鐵道の敷設に従事す、尋て重砲通過の爲め長嶺子土城子附近の道路を改修せり、

八月十九日旅順第一回總攻撃に参加し、野戰砲兵第二旅團砲兵陣地の構築及警戒掩護並に電話線の架設に従事す、九月一日より龍眼北方クロボトキン角面堡の對壕作業及攻撃に参加し軍司令官より感狀を附與せらる、但一小隊は前任務を續行せり、尋て松樹山砲臺對壕及外岸砲臺破壞工事に従事し十月三十日同攻撃に参加せり、十一月二十五日より赤坂山及標高二〇三の攻撃に参加し軍司令官より感狀を附與せらる、次て寺兒溝北方高地に於ける地雷搜索鐵條網破壊に任じ、又三里橋北方高地の攻撃に参加せり、同高地攻略の後椅子山砲臺に向ひ對壕作業に従事し明治三十八年一月二日旅順の開城に會す、

中隊は旅順開城後砲臺砲壘及軍用材料の整理に任せしが、尋て北方に轉進し、小北河附近の軍橋架設及奉天高力屯間の輕便鐵道布設に従事せり、四月三日より高力屯守備隊に増援及通江口軍橋保護並に道路修築に従事す、尋て一個小隊は兵站司令部に配屬せられ通江口、小塔子法庫門に於て道路橋梁等諸種の作業に従事し、他の一個小隊は小塔子金家屯間の輕便鐵道の布設に任じ、尙他の一個小隊は法庫門に於て軍の射撃場及倉庫の構築に従事せり、

其四 後備工兵第二中隊 (編成擔任工兵第一大隊)

中隊は明治三十七年十二月六日動員を令せられ編成を終り、翌三十八年一月二十五日金子工兵大尉(昌明)指揮の下に東京出發、二月六日大連に上陸、第三軍に編入せられ北進の途に就き三月二日小北河附近に集中を終る、

同日より小北河河水貯藏所構築黒陀子八三堡子橋梁架設に任じ、兼て媽々街三尖泡橋梁の補修をなせり、三月十二日より更に北方に轉じ、高力屯附近遼河の橋梁同村防禦工事二道河軍橋架設其附近道路の改修に任せり、六月より雨期に於ける石佛寺軍橋の保護に任せり、爾後の行動は第三軍兵站監小畑少將(蕃)より授與せられたる左の賞狀に明かなり、

右明治三十八年六月より石佛寺軍橋の維持改修並船舶航通の爲にする橋門の開閉等に任じ、殊に七月下旬より八月月中旬に互る遼河の増水に際しては、或は橋礎を毀壞せられ或は兩岸に大なる氾濫を生じ、橋梁の保持頗る困難となり殆ど交通を杜絶せんとするに方り偶々新來せる第十四師團の同軍橋を通過して前進するに會し、中隊は一層の奮勵を以て日夜多大の難苦を冒し一は軍橋の保持に努め一は臨時材料を以てする漕渡に任じ、以て能く同師團をして豫定の前進を沮碍せらるゝことなきを得せしめたり、爾後銳意更に同軍橋の補修に力め、殆んど其構造を一新するに到り尋て十一月月上旬以降遼水の結氷を始むるや、連日激流氷に對する防護作業に従事し幾多の勞苦に堪えて遂に軍橋の維持を全ふせり、茲に長日月間の勤務に對し特に之を賞す(明治三十八年十二月二十三日)

かくて凱旋の命に接し、明治三十九年一月下旬石佛寺を發し二月十四日板橋着同十九日復員完結せ



其五 其他の部隊

以上の外後備工兵第二中隊、野戦電信隊、第二軍及第四軍兵站電信隊第二軍電信隊員等の編成あり、何れも滿洲に於て誠實に任務を遂行せり、其行動は今暫く他日に譲ることとせり、

第十九章 輜重兵第一大隊及補助輸卒隊

其一 輜重兵第一大隊 (東京市四谷)

淡の高祖三尺の劔を掲げ天下を一統するや、蕭何を擧て功第一となす、蕭何は戦時輜重の任務を擔當せる者、蓋し輜重の任務たる勝敗に關する重大、徒に勞多くして赫々の功を見ざればなり、戦時輜重機關の重大なること、自明、其機關の一たる輜重兵第一大隊は明治三十七年三月六日動員を令せられ同十二日動員完結、五月一日より四日に亘り衛戍地出發、品川より汽車輸送を以て歡呼の聲に送られ征途に上り四日より六日に亘り宇品着廣島市の西草津村附近に合營す、六月三日より宇品を出帆し同九日清國盛京省張家屯に上陸を終り亮甲店金州を経て同十二日大毛家屯附近に集中す、當時大隊の幹部は左の如くなりき、

大隊長 輜重兵大佐 奥村 元 信 副官 同 大尉 山 本 友 吉

第一縱列長	同 大尉 高橋源四郎	第三縱列長	同 大尉 近藤 年
牛縱列長	同 少尉 和田 義 親	牛縱列長	同 少尉 堀 正 吉
同	特務曹長 吉澤 貞 直	同	特務曹長 志 村 實
第二縱列長	同 大尉 志村常太郎	第四縱列長	同 中尉 會田弘三郎
牛縱列長	同 少尉 肥 田 豐	牛縱列長	同 少尉 藪崎惣太郎
同	特務曹長 大津 平 吉	同	特務曹長 平尾 新 造
馬廠長	同 中尉 土 肥 鑑		

兵站糧食  
監視隊

旅順方面  
の任務

山本大尉  
直話

以上四縱列の外、小原輜重兵大尉(潤二)の指揮する兵站糧食縦列及三個の輜重監視隊(第一少尉宮本俊雄、第二少尉上田篤次郎第三少尉一條直衛)は相前後して同一の行動を執る、六月十三日より七月二十五日に至る間、金州―三十里堡、三十里堡―前革鎮堡及喚水屯間に糧秣輸送をなす、同二十六日より双臺溝附近の戦闘に參與次て前革鎮堡より榮城子、榮城子より双臺溝後沙包間糧秣輸送に任ず、此間八月初旬より約一ヶ月滿洲の雨期に際し行動頗る困難を極めたり、副官山本大尉は出征より凱旋に至る迄大隊と始終せし殊勲者なり、當時の状況を語りて曰く、乾燥すれば灰の如き遼東の土は毎日の雨に泥海と化した、其のぬかる事と云ふたら輜重車の軸を没し車臺の格子目が土に跡を残すと云ふ始末、加ふるに敵の射弾距離内であるから晝間の行動を許さない、縦列は皆夜暗を利用して出て行くのである、それで日々の行程は往復で十一里、餘り近くもないのに道が悪いから往路實縦列の行進は一里に約三時間を費しつゝあつた、

第三編 部隊の活動 第十九章 輜重兵第一大隊及補助輸卒隊 六一七



入院して  
好まぬ  
も後送な  
いな

車をすて  
てにける

奉天大會  
戦

状況が此の如くであるから無論健康も害する、八月初旬から一週間計りの中に、脚氣患者が激増して輸卒は二百人も入院する其上尙多數の休業患者と約百九十頭の休業以上の患馬を生じて實に名状すべからざる困厄に陥つたが、一般に士氣旺盛でたとひ入院しても内地へ後送せらるゝのを好まないとはいふ有様は、實に頼母しくありました

と又森田輜重兵曹長は豫備として従軍せる者曰く、  
此の如き始末だから支那車輛をやとひ上げる、ボコペンといふて應じない、止むなく賃銀を増して無理やりに徴發する、そこで例の頑丈なる支那馬車で輸送を初めるものゝどうしても動かばこそ、或は時に顛覆することもある、どうすることも出来ない、するとチャン公車をすて、逃げてしまふ又オイ／＼と泣ひて居る者もある、

此の如き困難なるにも拘らず輸送充實一日も休むを得ざりき、八月二十一日以後長嶺子後沙包間糧秣燃料加給品等の輸送に任じ、尙火石嶺子及碾盤溝より、赤坂山其附近に向ひ海軍砲並に材料の運搬に従事せり、當時尙左方椅子山及案子山より砲撃を受くるを以て輸送は皆夜間に於てし、且此の地方地隙多く行動不便なりき、旅順開城後は長嶺子より水師營及旅順間の糧秣輸送に従事す、

明治三十八年一月二十日師團の北進に伴ひ旅順附近を出發し、寒風を冒し氷雪を踏み金州蓋平海城を経て二月十二日沙河附近に集中を終り同十九日呂宋子附近に移轉す、

二月二十七日奉天大會戦は開始せらる、大隊は左翼乃木軍の北進に伴ひて行動を起し、同夜大谷に

日々の行  
程二十里  
に及ぶ

凱旋

翌二十八日六間房三月一日養猪園子附近、二日黄花甸子三日合達堡子四日五道溝子五日岔路溝六日老虎牛に達し翌七日滞在、八日古城子に轉じ十一日に至る迄滞在、同十二日大新屯に宿營す、此間二旬日々の行程二十里に及ぶことあり然も士氣旺盛車輛の保存極めて好況を呈し殆ど廢物を見ざりき、

三月十三日より馬三家子より鐵爐舖及大孤家子間糧秣輸送、四月十一日大新屯より三臺子附近に移轉し古城子四家子間糧秣輸送に任ず、五月二日三臺子より鮑家屯に移轉し次で通江口より頭臺子前孤家子及關家屯間に糧秣輸送をなす、五月二十九日以後小塔子より關家屯錢家屯及蕉家園子間に糧秣及加給品輸送中、十月十六日平和克復の通知に接す、同十七日孫家屯(孤樹子北方三里)に移り遼河の水路輸送により錢家屯に向ひ糧秣の輸送をなす、

かくて此年も暮れ明治三十九年一月二十六日孫家屯の宿營地を發し、水陸行路難なく二月六日東京に凱旋せり、其出征間に於ける主たる幹部を擧ぐれば左の如し

大隊長	輜重兵大佐	旭四功四	奥村	元信(東京)	中隊列長同	少尉同	吉澤	貞直(栃木)	
副官同	大尉	旭五功五	山本	友吉(兵庫)	同	同	朝枝	政千代(島根)	
隊列長同	同	同	高橋	源次郎(東京)	同	同	志村	實(山梨)	
同	同	旭五	曾田	弘三郎(島根)	同	同	平尾	新造(滋賀)	
同	同	同	佐藤	音四郎(宮崎)	同	同	齋藤	幸作(富山)	
同	同	中尉	旭六	肥田	豊山(梨)	同	旭六	多田	愛治(茨城)
馬隊長同	同	同	堀	正	吉山(形)	同	旭六	坂本	武四郎(茨城)
第三編 部隊の活動		第十九章 輜重兵第一大隊及補助輸卒隊						六一九	



縦列付 三等軍曹	旭六	松本 諭(熊本)	縦列付 二等歌醫	旭五	田野 千剛(千葉)
大隊付 一等主計	旭五	廣部 文助(千葉)	馬殿付 同	旭六	清水 近平(栃木)
縦列付 二等主計	旭六	志村 藤七(山梨)	縦列付 三等歌醫	旭六	平吉 貞彦(鹿児島)
同	同	高橋 季吉(東京)	同	同	上野 重規(同)
同	三等主計	同	同	同	雄谷 助次(石川)
同	同	高橋 平太郎(北海道)	同	同	
同	同	旭七	石塚 源之進(埼玉)		

其二 補助輸卒隊

補助輸卒隊は日露戦役に於て創設せられ後方勤務に服せし者なり、懐ふに日清戦役の當時後方部隊の不足を告ぐるやゴロツキの如き人夫を多数使役し軍紀風紀を亂し混亂踏に懲りし當局者は、更に一計を案じ茲に補助輸卒隊の成立を見るに至りしなるべし、戦役中我が第一師管に於て編成せられたる部隊は合計二十八に上り、其召集擔任部隊は輜重兵第一大隊を初め歩兵第二同第十五騎兵第一同第十五同第十六聯隊及東京海軍要砲兵聯隊なり、多くは、後備の憲兵騎兵輜重兵佐尉官を隊長に任じ輜重騎兵の下士上等兵を下級幹部とす、其兵卒は縦列や行李付の者と異り、三十年頃より以後の補充兵を召集せし者なれば其年齢は歩兵の豫備役に相當し、大抵一廉の職業を有する者多く、吾輩の知れる者にも群馬の辯護士あれば埼玉の小學校教員あり、東京の質屋の主人あれば栃木の開業醫あり、其他學士得業士等知名の人士亦尠からざりき、

補助輸卒隊の編成

知名の士

其任務  
器用さ驚  
たりに堪へ

糧食整理  
車曳き

天晴れの  
若旦那立  
力派なる輩  
海上勤務

助手

建築班

補助輸卒の任務たる多種多様糧食整理車曳トロ押し建築裁縫船夫掃除看病より馬の手入書記道普請薪割は勿論時に火葬迄も行ふ事あり、何様種々なる階級の人物を網羅せることゝて命令と共に立ちに處辨するの器用さは驚くに堪へたり、

糧食の整理は補助輸卒の本務とも云ふべく、米麥雜詰等の兵站部に着するや直に員数を調べ倉庫に格納す、而も自ら手を下し之を負ひ之を積み上げるなり、又車曳きは荷車に四五人宛取付き前曳後推するなり、四五人にて一車を曳くと安樂の様に出ゆれども、滿韓の地たるや道路不良唯歩行するさへ困難なる險坂深泥多ければ輸送中々容易ならず、殊に雨期となりては濁水途に充ち激流中を徒涉しつつ輸送を行ふなれば其困難は言語の盡す所にあらず、かゝる風土に於て炎天に曝露し霖雨に浸りつつ毎日の勤務なれば、家にかへれば天晴れの若旦那も顔面アフリカの黒奴の如く、あはれ立派なる車力支那人の所謂「暖呀日本苦力」となり滑しぬ、是も奉公の一端ならんか、

船夫は海岸に生長せる者より撰拔し、傳馬の操縦荷物の積み卸しに従事せる者、堅緻なる戎服さへあらめの如くなれるを見ては誰か一滴の涙ならんや、  
又役場員學校教員の如き文筆の素養ある者を撰みて兵站部、本部などに隸屬し書記の任務を補助せしむ、書記と云へば氣樂なるが如くなれども其實は然らず、其多忙さは言語に絶し時に神經衰弱さへ起せし者もありと云ふ、

建築班は大工左官等より成るバラックの建築の如き見る間に仕上るを常とす、其他トロ押し道普請



橋架け薪割に汗を流しはる者あれば、掃除馬の手入に砂塵を浴び看病火葬に涙を流しつゝ古今未曾有の外征に従事せり、此間不幸中途に病没し又は後送せられし者尠からず、故に各隊編入總人員は出征數の約四倍に上れりと云ふ、以て其勞苦の戰闘部隊に譲らざるを察知すべきなり、

日給僅に六錢  
好成績多  
大の軍費  
節約  
傳家の短  
刀一振お  
國民は感  
謝すべし

補助輸卒の受くる日給は僅に六錢に過ぎざれば、戦地に在りては巻烟草一個を買ふに足らず、又昇進の途あるにあらす、或る僥倖の場合を除く外金鵝勳章を受くる望あるに非ざるなり、此境遇にありて敢て不平を鳴さず孜孜として其職務を盡し、一意上官の命令に服したれば、彼の日清戦役にゴロツキ人夫が日給七十錢を受け尙不承不承に働きたる後方勤務は、より完全に、より敏活に驚くべき好成绩を挙げ延ひて多大の軍事費を節約し得たるなれ、是れ識者の皆認むる所、加之規定の徒歩刀こそ帯びざれば傳家の短刀一振位は尠に携帯して不慮の變に備えし健氣さは嘆賞に堪えざるなり、然るに人多くは戦線に於る花々しき動作のみに目眩み後方に於ける不眠不休の勳勞を忘るゝが如く、又凱旋後にありても輸卒と云へば何となく尊敬を拂はれぬ傾あるが如し、彼等とて決して好んで輸卒を志願したるには非ず、國民の義務として奉公の誠を致せる者なり、故に國民は其精勵擲遇及功績に對し滿腔の同情を以て感謝の意を表せざるべからず、

(感狀)

第一師團第六補助輸卒隊 輸卒

鹽野谷

繁三郎(群馬縣新田郡尾島町)

明治三十七年五月十日敵兵三百餘騎安州城ヲ襲撃ス此時輸卒ハ安州兵站司令官加曾利大尉ノ指揮下ニ在テ銃ヲ執リ東北門南方高地ノ守備ニ任シ勇敢能ク戦ヒ敵騎ノ突撃シテルニ方リ亦沈著能ク之ヲ防ケリ身ハ遂ニ重傷ニ斃ルト雖モ其動作人ヲシテ奮興

セシムルニ足ル仍テ本職ハ其忠勇ヲ表彰ス

明治三十七年五月十日

第一軍司令官

男爵

黒木爲楨

日露 御旗之光 大尾

第三編 部隊の活動 第十九章 輜重兵第一大隊及補助輸卒隊



本居宣長

しきしまの、やまとこころを、ひととは、

あさひにほふ、やまさくらはな、

御旗の光の後に書す

文學士 沼波武夫

戦争は人生の大惨事なり、互に誓つて戦争せざる事となさむ軍備を絶て撤回する事となさむとの主張あり、この主張は甚以て結構なる主張なり、左れどこの主張は世に正のみありて邪無く直のみあつて曲なき曉あかつきに於て始めて實現せらるべし、斯る曉は果して來るべくや、曰く否、

抑此世に絶対のものあるなし、あらゆる事物悉く相對なり、天あり地あり、日あり月あり、火あり水あり、男あり女あり、正あれば必ず邪あり、直あれば必ず曲あり、自然は絶対の存在を許さざるなり、實在の事物に絶対のものなきは論より證據ならずや、

已に邪あり正の進路を妨ぐ、正は之を破て進まざるべからず、是に於て戦争あり、相對はあらゆる時とあらゆる場合に於て存す、正を把持し正を行ひ正を擴げ正を進めんとする者は、邪を把持し邪を行ひ邪を擴げ邪を進めむとする者と一步毎に戦はざるべからざるなり、かるが故に戦争は永遠に之あり之れ無るべからず、個人と個人との戦争あり、個人の團體なる國家と國家との戦争あり、吾人の祖先は過去に於て戦ひき、吾人は現在に於て戦ふ、吾人は吾人の子々孫々の爲に「戦へ」と遺訓し戦ひの經驗を記し戦の方法を教へて倦まず戦を続けしむべし、平和を欲する者は去つて絶対の世界に行け、而して其所そこに息いきある屍かばねの如く安眠せよ、吾人は相對の世界にあり、在るを幸とす、眠よりは覺めたる

御旗の光の後に書す



を愛す、安逸よりは奮闘を愛す、活氣、活潑、活動、活の字は吾人の本尊なり生命なり、活の字は相對の世界にのみ存在す嬉しき哉、正に對して邪あるの世、直に對して曲あるの世、

或は疑を容れむ、天と地と、日と月と、火水男女を並立せしむるは宜し、然れども何が故に自然は正と共に邪を置き直と共に曲を置くかと、余は自然に代つて答へむ、邪を置くは正をして強固なる正たらしめむが爲なり、曲を置くは直をして強固なる直たらしめむが爲なりと、正を助長せしめむが爲の邪なり直を助長せしめむが爲の曲なり、罵詈雑言の矢面に立つて基督は初めて基督たり得しなり、雲と群る魔軍に圍まれて佛陀は始めて佛陀たり得しなり、

吾人は茲に斷言せむとす、吾人は日本人なりとの觀念を離れて極めて公平に斷言せむとす、現時世界に於て基督佛陀等の聖教に最近き行動を取るは日本なりと、現今全世界に於て存在を認め得るは歐米兩洲と日本國のみなり、而して米は唯慾深き洲なり、金だに與ふれば面に尿せらるゝをも辭せざるは米人なり、歐は迷へる洲なり實在を眼中に置かざる架空の理論と濁れる實在に巻き込まれて清める實在を建てむとせざる雷同的實行と紛々相亂れて統一の大綱寸斷せられ了れり、されば歐も米も個人ありて國家を見ざるなり、日本に於ては然らず、日本人とても金を愛す然れども或る境界線を越えては貨幣の山を積むも事を諾せざるなり、日本人とても時に架空の理論をなし雷同的實行をなす、然れども是一時の氣まぐれのみ、日本人の腦には實在の印象甚明確にして且つ清める實在を理想とする事は疑ふべからず、日本人も個人的態度を取らずとは云得ず、然れども之は取つて可なる時に取るのみ

事全日本國に關する時んば國中個人の隻影を止めざるにあらずや、

借問す、日本程高く日本程清き國他に存在せりや、吾人聖教に最近き國として日本を推すは決して過誤に非ざるを信ず、更に借問す、日本以外に眞の國家ありや、吾人國家の標本として日本のみを示さむとす、論ずる者あり國家の存在無用なりと恐なる哉言也、五尺の身軀あるありそこに自我宿る、萬斤の鐵鎚を以てするも之を碎くべからず、他に又五尺の身軀あり自我を宿す、他に又あり他に又あり、而して此等の自我に共通の性あらば衆相集つて大我を構成す、この傾向は萬重の石壁を以てするも妨ぐべからず、敢て人のみならず生物と無生物とを問はず萬有悉く斯の如し、自然の勸むる所なり自然の法規なり、人自然の法規に従つて大我を構成す是れ國家の成る所以なり、用無用を論ずるの餘地抑何處にか存せむ、國家碎かれなば殘るは極めて危険なる状態に立てる個人のみ、國家の無用を論ずるは身軀の無用を論ずると等し、已に五尺の身軀あり必ずや國家無るべからざるなり、

日本が露國に勝ち得しは眞の國家なりしが爲なり、國中陣中個人の隻影を止めざりしが爲なり、日本は清める實在を建てむが爲に露國と戦ひしなり、この大事實は世界をして覺醒せしめしに似たり、日本も亦最明確に最具體的に自覺せり、

最高く最清き日本は最自然の道に適へり自然は日本をして愈強固ならしめ日本を愈助長せしめむとす、大國清をして日本に抗せしめ僅に十歳を経て更に大國露をして日本に抗せしめし自然の意は基督に迫害の矢を放ち佛陀に魔軍を向けし自然の意と何の異なる所ぞ、自然は今後なほ數倍の迫害の矢數倍



の魔軍を向け、日本を練磨せむとすべし、倦まざれ屈せざれ正を把持して邪を破れ直を把持して曲を  
四  
碎け、活の字を守つて相對の甲斐あらしめよ、これ自然の命する所なり辭すべからざる日本の天職な  
り、

## 跋

將士銃劔を執りて戦ひ史家之を傳ふ。日露戦役は曠世の大戦なり豈に傳へざるを得むや、而して今日之に關する著書汗牛充棟も啻ならずと雖も、多くは是れ實を誤り眞を寫さず信憑するに足る者洵に稀なりとす、

抑々文士の史を編するや、恰も將卒の戦場に臨み策戦計畫の妙以て勝を制するが如し、材料の收拾撰擇宜しきを得て始めて其眞價を發揮し得るなり「御旗の光」は即ち此の點に於て最も卓越せる者とす、僅に第一師團の戦記を叙するに殆ど一年有半の歳月を費せり、其間編者親ら當同者の記録を請ひ受け或は實戦の將士に聽き苦心慘愴漸く之を完成せし者なり、本書を讀過する際肉動き血湧き、大和民族の精華が義勇を公に奉じ滿洲の野に奮戦するの光景彷彿として眼前に現出する亦故なきにあらざるなり、

夫れ過去は歴史にして多く忘じ易し、親から彈雨劔電の間を驅馳せし者も猶且歳と共に沙塲の夢かすかなる者あらむ、況んや後世子孫に於てをや、隨



て本著の如き過去回想の料として編者の努力と材の鮮と相待つて世に傳はるべき者と謂ふべし、會々跋を乞はる因て不文を顧みず所感を陳べて之に代ふ、

明治四十年七月下旬

明渡泰次郎識

### ◎大日本奉公會設立の趣旨附會員募集

國家の進運時勢の要求に應じ國民の元氣を振起し併せて教育の進歩實業思想の涵養を企圖する爲め茲に大日本奉公會を設立す

本會は其第一着手として日露戦役に關せる國民奉公の事蹟を蒐集して教育の資料となし且紀念に供せんが爲め日露戦役義勇奉公録を編纂す、然れども斯の如き事業の完成は社會各方面の贊助に待つ所多しすなほ本會は廣く世上の同感者に訴え其援助によりて事業の基礎を堅くせんと欲す會員募集の趣意こゝにあり

されば本會の意を諒とするの士は下の條項に従ひ奮つて本會の事業を贊助せられんことを希望の至りに堪えず

榎本子爵の率ゆる帝國軍人後援會は本會の事業を贊助して其集めたる材料を寄贈し且便宜應援の勞を執らるゝことを約せられたり

一、日露戦役御旗の光 義勇奉公録の一部にして全國を師管別とし先づ其師管編成各部隊の實戰記を記せる者なり（其定價及細目は其都度之に明示す）

一、會員の種類

正會員 日露戦役御旗の光一冊以上を引受けらるゝことを約せられたる者

賛助員 本會の事業に盡力したる者及御旗の光五冊以上を引受らるゝことを約せられたる者

一、入會及特權 入會を希望せらるゝ者は住所姓名及所要の書名冊數を明記して申込るべし

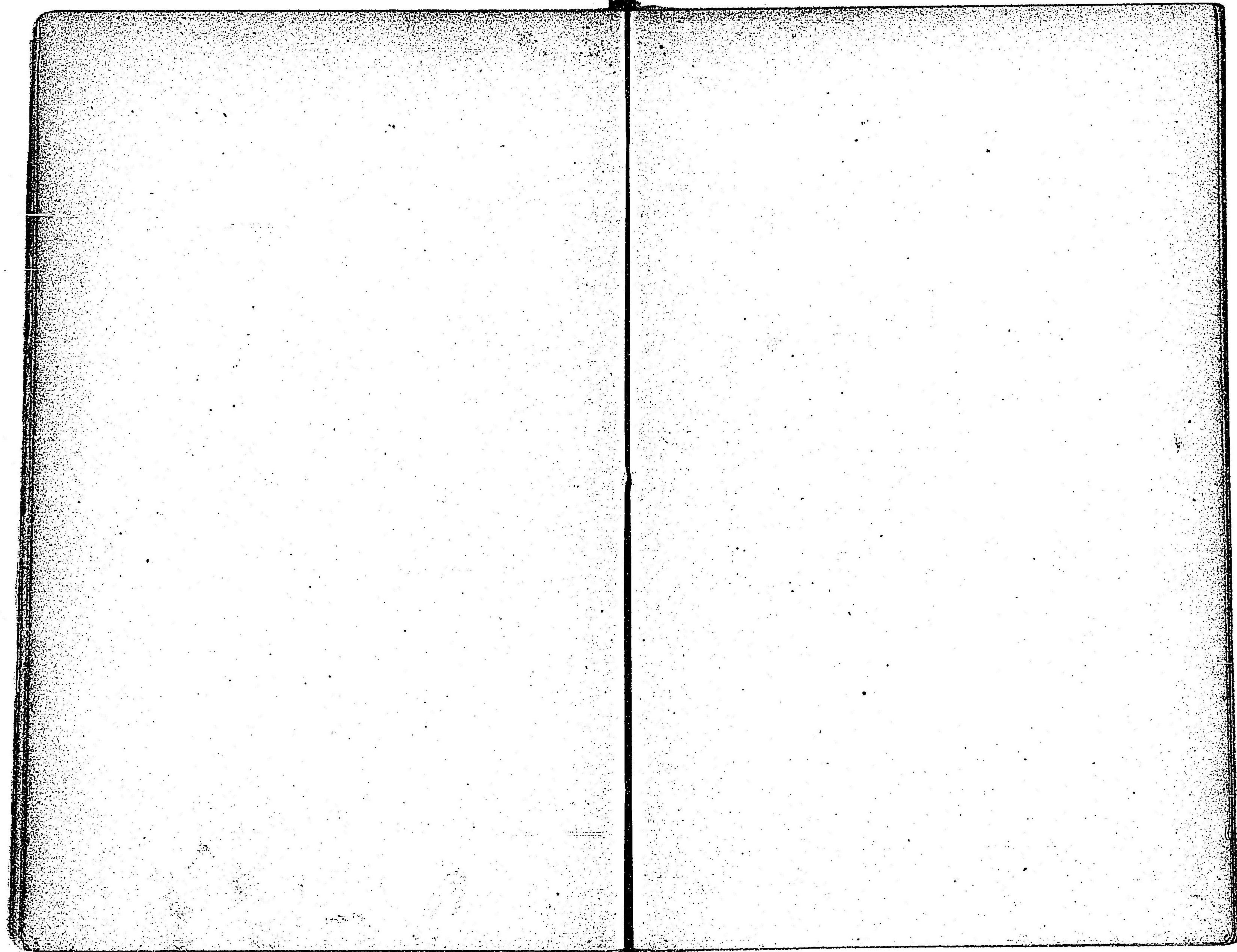
會員には本會出版の書籍を特價にて頒つ

一、會員は發行の通知と共に特價に相當する金圓及郵税を添えて本會主幹宛送付せらるべし、本會は着金の順序により送本す若し送金後二週間を過ぎ到着せざるときは必ず御問合せ下されし











明治四十年八月三十日印刷  
同 九月二日發行

定價金貳圓

編輯者兼

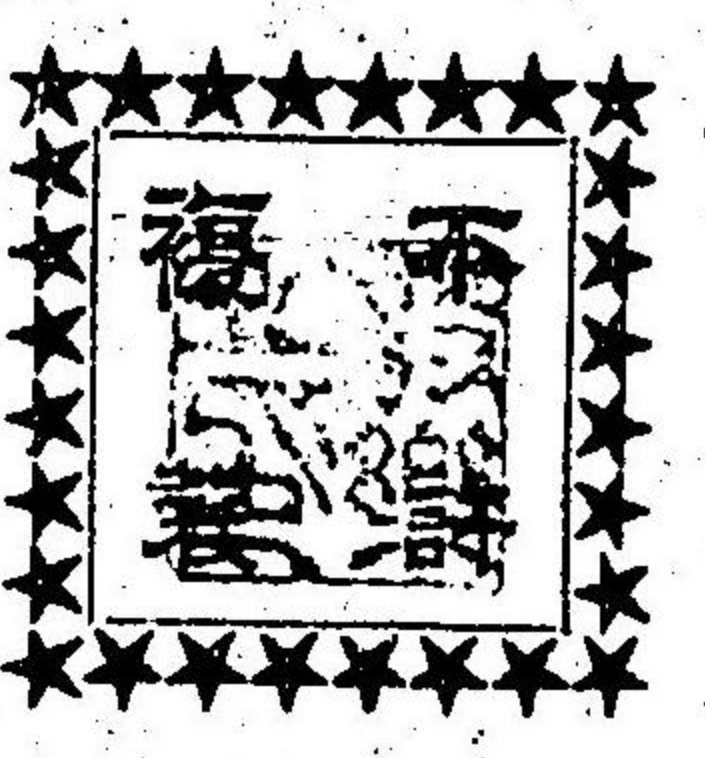
設樂金三郎

印刷者

山田英二

印刷所

博文館印刷所



發行所

大日本奉公會編輯部

東京市本郷區弓町二丁目廿五番地

特約發賣所

東京堂書店

賣捌所

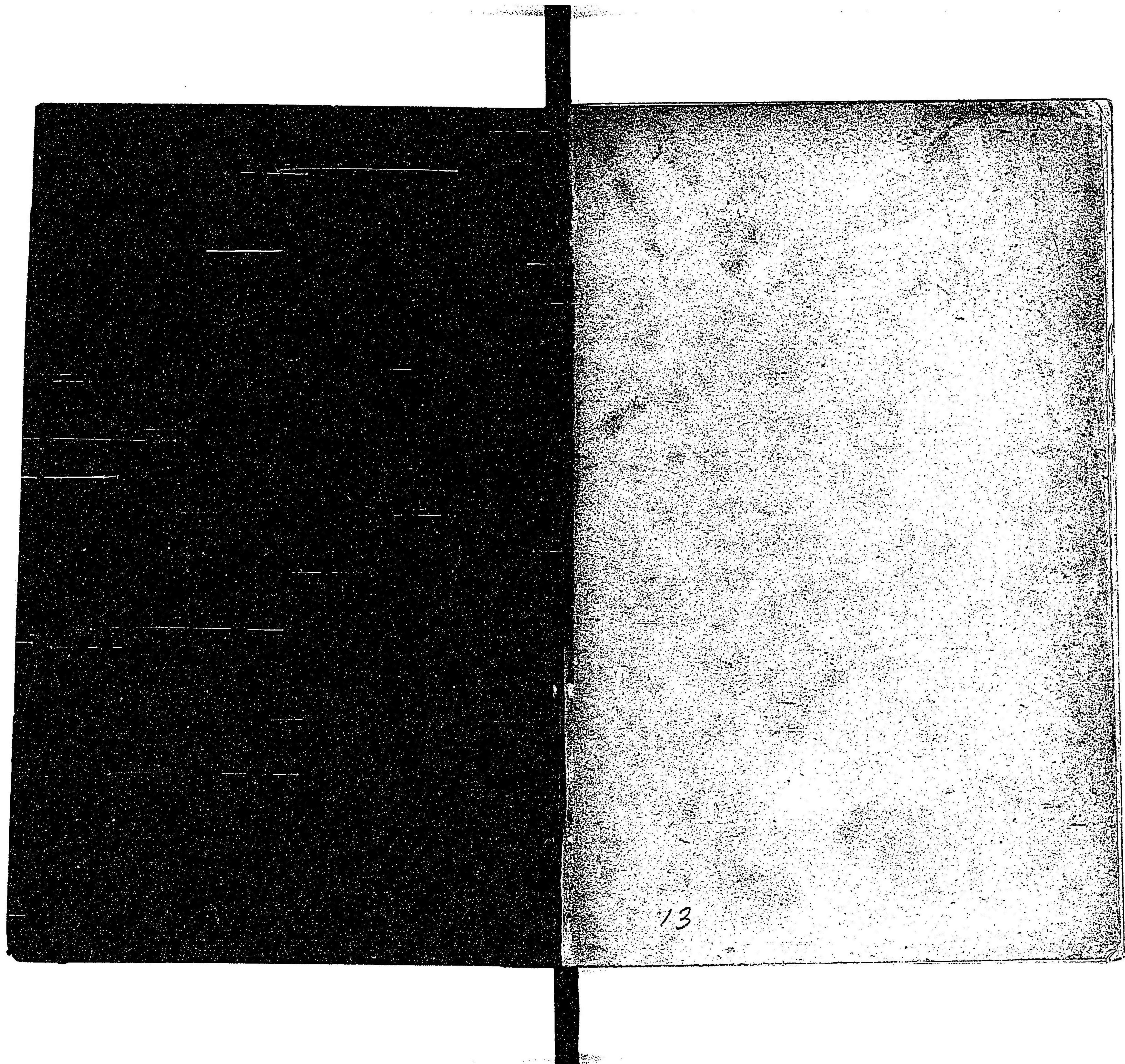
全國各地書林

東京市神田區表神保町



42  
277



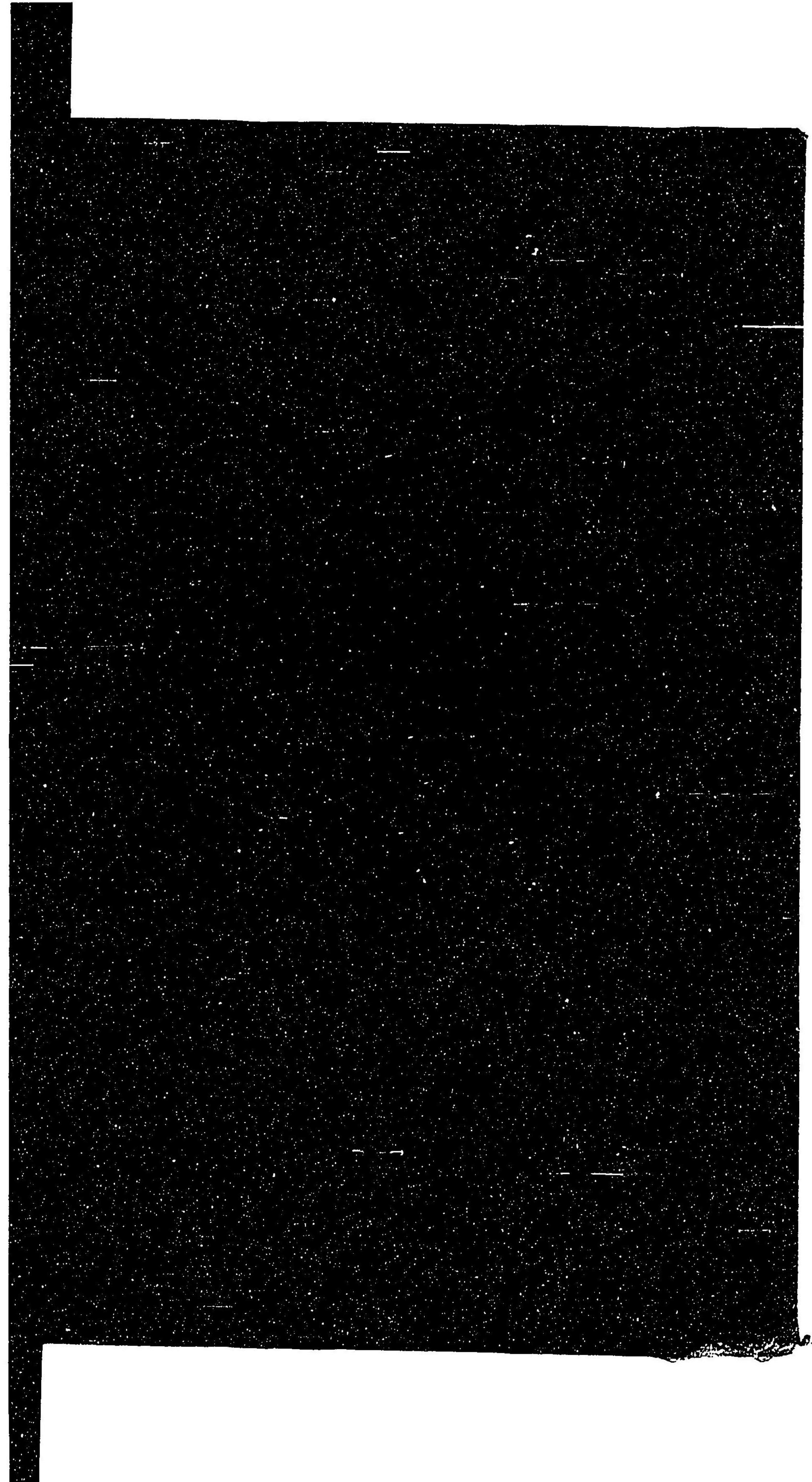


13



42  
277









002849-000-1

42-277

日露戦役御旗之光 第一師管健児部隊戦記

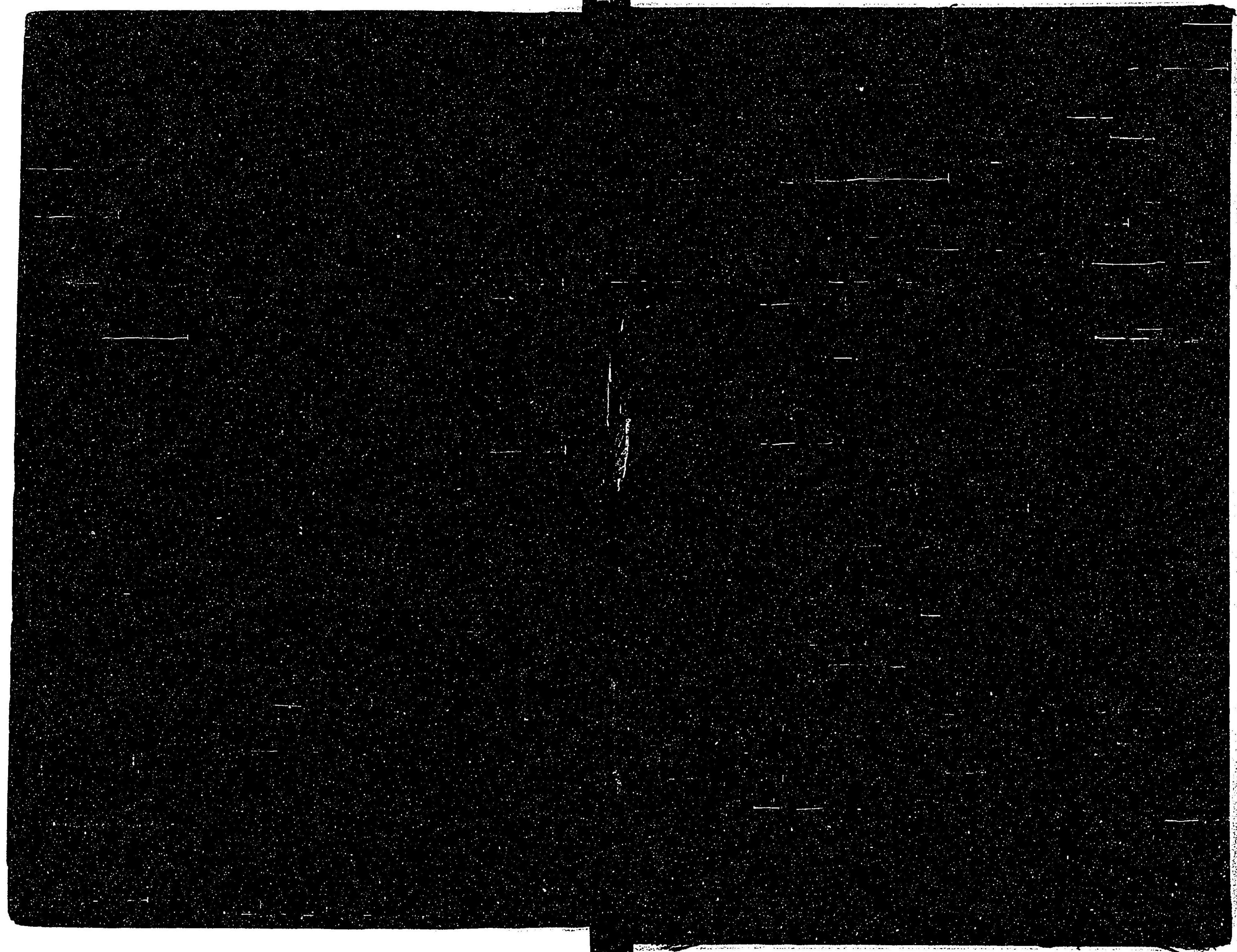
設樂 金三郎/編

M40

ACB-6365









42  
277